九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# ハリバッタ・ジャータカマーラー研究（三）：第一二、一四、一九、二〇話和訳

岡野, 潔
九州大学大学院人文科学研究院哲学部門 : 教授

https://doi.org/10.15017/2559042

出版情報：哲學年報. 79, pp.47-111, 2020-03-05. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

# ハリバッタ・ジャータカマーラー研究（三）

## ―― 第一二、一四、一九、二〇話和訳 ――

岡野　潔

今回は『ハリバッタ・ジャータカマーラー』の第一二、一四、一九、二〇話の、四つの章の和訳を行う。このように章がとびとびになっているわけは、この和訳のために用いたHahn (2007) とHahn (2011) の梵文校訂テクストが、写本の大きな欠損がない章を優先させて校訂・出版を行ったため、このように写本の不完全な途中の幾つもの章をとばした姿のものであるからである(1)。

ハリバッタの本作品は、布施・戒・忍辱・精進・禅定・智慧という六波羅蜜の区分に従って各話を順に配置する構成をもち、第一～第一一話が布施、第一二～第一七話が戒、第一八～二一話が忍辱、第二二～二五話が精進、第二六話が禅定、第二七～三四話が智慧をテーマにしている(2)。

インドで成立したこのハリバッタ作ジャータカマーラーは中央アジアの諸国にも広まった。この作品のウイグル語訳と梵語の両語を併記した断片写本や、トカラ語訳の断片写本が発見されており、また近年アフガニスタンで出土した「スコイエン・コレクション」写本の中にも梵文の断片が見つかっている(3)。またホータン・サカ語で書かれたRddhiprabhāva作のスダナ説話の詩にもハリバッタの作品の影響が見られるようだ(4)。また五世紀前半にホータン（于闐）国の大寺で開かれた説法会（pañcavārṣika-maha五年に一度の法会）の行事において胡語で説かれた仏教説話

の説法を当地を訪れた八人の中国僧たちが集めて翻訳したことで成立した作品である漢訳『賢愚経』の中に、ハリバッタの作品の第一話（光明王）に基づいた説法が入り込んでいる事実も、中央アジアでこの作品が親しまれていた証拠といえる。これらの西域の諸国におけるハリバッタの作品受容の痕跡は、インド本国におけるその作品の人気の高さの反映であるといえよう。インドのハルシャ＝ヴァルダナ王（戒日王）の治下で詩を愛好する多くの人が「ジャータカマーラー」のジャンルの文学作品（アーリヤシューラやハリバッタの作品を含む）の写本ばかりを所有していた事、「斯れを美の極みと為す」と高く評価していた事を、インドに留学した義浄が『南海寄帰内法伝』巻四、三十二讃詠之禮で伝えている。五～八世紀の時代はインド仏教の梵語文学が「ジャータカマーラー」への熱狂に支配されていた時代であったことを、その時代のインド・西域・南海の仏教芸術を見る時にも考慮しなければならない。

## 第一二話　孔雀ジャータカ（5）

かつて孔雀として生まれ、道徳律（戒）を保持した、かの〔世尊〕は、命の危険の状況下で生類を救いました。そのお方に誰が篤い尊崇の心を起こさないでしょうか。〔二二・一〕

◇　次の様に伝え聞いています。―　(a)芳しい蓮の群に覆われた巨大な浄い水をたたえ、(b)シッダ（高山に棲み空を飛ぶ半神の種族）の者たちの心を爽やかにしている、(c)満ちた月の円盤のように〔ひかり輝いている〕マーナサという偉大な湖によって、(a)一つの地域が美しく飾られている〔ヒマーラヤ〕、(b)ガンガー（ガンジス河）の水の落下によって震動させられているブールジャ樺やデーヴァダール杉や金剛菩提樹の森をもち、(c)〔あちこちに〕流れ出す無数の湧き水があり、(d)まるで銀の円柱群〔が並び立つか〕のように雪の堆積によって甚だ嵩が高い幾千の尖峰によって〔山脈の〕上方が覆われている、(e)また〔或る所では〕ライオンへの恐怖に駆られて動くヤクの群のわなな

き震える沢山の尾によって扇がれている〔枝葉の震える〕叢林がある、(f)また〔或る所では〕滝の水によって洗われている板状の岩々があり、(g)花咲いた蔓草の先端のまわりを飛び回る賑やかな蜜蜂の群が立てる羽音の歌が〔聞こえている〕、(h)〔王位の〕灌頂を受けたかのように〔王者然と〕輝く、至高の山であるヒマーラヤにおいて、(a)燦めくサファイアの澄んだ棒そっくりの頸をもち、(b)貝の真珠層の切片のように輝いている白いすじが目のきわの所にあり、(c)〔細長く〕裂けて開いたデイゴの花に似た赤い嘴をもち、(d)大きい色鮮やかな翼があり、(e)まるで青睡蓮の花びらが〔表面に〕撒き散らされた、一団の新鮮なアカシアの花々の群れのように見える大きな尾羽のある、スヴァルナ＝アヴァバーサ（金光明）という名の孔雀の王が(6)、菩薩（釈尊の前世）として、おりました。

カラフルで色あざやかな羽をもつその至高の孔雀を創造して、『業（カルマ）』という造形芸術家たちも、眺めて、〔そのできばえに〕驚いたかのようでした。〔二二・二〕

〔雨期の〕黒雲が到来して、かの孔雀王が舞うことに情熱を起こしたのを見るや、羞恥心をいだいたかのように、『稲妻』という踊り子たちの〔空中での舞踏が示す〕艶めかしい美しさは力を弱めて、閃光の少ないものになりました。〔二二・三〕

ドラムのような音を立てている河水の滝と、甘美な音を立てる蜜蜂たちの〔羽音の〕琵琶に合わせて、かの孔雀は舞の名手のように、美しい蔓草の森の内奥の住まいにおいて、きらびやかに舞い踊りました。〔二二・四〕

山の斜面の崖の上に登り、宝石の環のごとき〔尾羽の〕月輪を震わせ燦めかせながら、かの〔孔雀〕が舞いをなす時、風によって吹き動かされる森を纏ったヒマーラヤは、その時〔孔雀王という〕王冠を〔頭に〕載せているかのように輝いて見えました。〔二二・五〕

まるで愛神（カーマ神）の妻が大地〔という額〕の上に一つの色鮮やかな額飾りを描いたかのような、〔大地に〕美しい尾羽を広げている、かの孔雀〔の色鮮やかな姿〕に対して、〔高山に棲む〕シッダ族の女たちの視線は熱

い興味によって固く留まったまま、見飽きるということがありませんでした。〔一二・六〕

〔地平の〕果てまで空の諸方の広がりが淡い白色の雲塊に〔うっすら〕覆われている〔季節〕、―まるで真珠のように清らかな水の〔季節〕として、秋の季節が到来した時、かの孔雀は〔換羽する尾の〕宝石のような月輪を大地の上に落としたので、サファイアの破片〔が地面に撒かれた〕かのように、大地は〔それによって〕輝きました。〔一二・七〕

美しい彼が、迅速ではない翼を有して、ゆっくり悠然と〔孔雀たちの〕群を引き連れて『善』の一道を歩む時、ヒマーラヤの大地が虹によって多くの色彩に染まって光り輝くさまに似て、その孔雀王は輝いて見えました。〔一二・八〕

◇　さて或る時、風の力に吹き散らされる花の香りが薫じている〔山林の〕諸方の空間の中、〔樹の〕周囲を飛び交う蜜蜂の群でまだら模様になっている、若い象の牙のように真っ白なケータカ樹（タコノキ科アダン）が、誰の心をも悦ばせる時節（春）を迎えた時、―

(a)クタジャ樹（コネッシ）・カクバ樹（アルジュナ）・クンバ樹・ニーパ樹・カダンバ樹の花々によって繁みが芳しくなり、(b)またインドラゴーパカ虫（雨ダニ）に〔赤く〕飾られた、エメラルドのように緑色をした草地と暗い色合いの森の地域をもつ、(c)眼に快く美しい、山々において、―

(a)燦めきを発する『稲妻』という腰帯で腹部（雲の下部）を飾り、(b)インドラの弓（虹）を出現させたり、(c)『雨滴』という矢を落下させて『炎暑』という敵を追い払ったりする、雨雲たちが空を覆い隠している時、―

冷たい霧雨に触れたことで太陽の熱苦を免れた蛇が〔やっと涼しい〕栴檀の木を離れてゆく時、―

(a)最初の〔襲い来る〕『高揚』（河の増水）という最愛の愛人の『波』という手がさしあげている泡で出来た花環をつけている、(b)濁った『水』という衣によって覆い隠されている幅広い『砂州』というお尻をもった、『川』とい

う女たちが、酩酊したかのように大胆になり〔恥じらいを捨てる〕時、―

夫が旅に出ていって〔悲しげに〕目に涙を溜めた妻たちに眺められているその家の孔雀たちが黒雲の〔発する〕音に喜んで耳に快い鳴き声を発する時、―

新しい雲が雨粒を落とし始めて、椰子やターリー樹やココナツ樹の林に澄んだ高い響きを起こす時、―

夜明けの時に、細かな雨粒に〔しっとり濡れて〕重くなった尾羽をもつかの孔雀王は、耳と心を引きつけ魅了する鳴き声を発しながら、まるで空を厳飾するためかのように舞い上がり、ヴァーラーナシーの近くにやって来ました。

その都城において、(a)ブラフマダッタ王と共寝していて目が覚めた、(b)互いに〔体を〕抱いているため〔肌に〕塗った香油が消えてしまっている、(c)蓮のような眼がまだ少し薄赤い、アヌパマー（無比なる女）という名の后が、かの王に尋ねました。

「王様（月のお顔をもつ方）、どうか教えて下さい、この響き渡る声は誰のものなのですか。あの、ずっと長く続いている声は私の心をとても清々とさせます。」〔一二・九〕

◇　王は答えました。「妃よ、〔あれは〕スヴァルナ＝アヴァバーサ（金光明）という名の孔雀王だよ。人間の言葉を発し、ヒマーラヤに棲んでいる。虚空を飛び回り、まるで金とエメラルドとサファイアと瑠璃を集めた塊のように燦めいているあの方は、生まれつき心を魅するこの〔妙なる〕声を持っているのだよ。」―　強い好奇心を懐いた妃は更に尋ねました。「どうしてあの孔雀王は〔評判が〕王様の耳にまで届いているのですか。」―　王は答えました。

「人であれ、動物であれ、すぐれた徳性をもっていれば、徳性は〔自然と〕輝きわたるものだ。闇の大きな塊を切り裂く、宝石たちの放つ光線のように。〔一二・一〇〕

何らかの理由によって、或る〔貴い〕お方が孔雀の姿をとり、眼の歓びとなる〔美しい〕存在となって、彼は

ヒマーラヤの森にいるのだよ。〔一二・一一〕

孔雀たちを統べるあの孔雀王によって、稠林が美しく荘厳された雪山（ヒマーラヤ）は、まるで〔彼によって〕守護主を得たと、自身のことを思っているかのようだ。〔一二・一二〕

〔山にかかる〕雨雲たちは、ごろごろ唸る音によって喝采の叫びを与えながら、舞いをなす彼を、きらきら輝く『稲光』という目によって〔歓喜して〕見つめるかのようだ。〔一二・一三〕

『雨期』という演劇の始まる時になると、まるであの『孔雀』という座がしらが呼び出した女踊り子のように『稲妻』は、ただちに輝かしい美をもつ自身〔の舞い〕を披露する。〔一二・一四〕

◇　聴覚をうっとりさせるその孔雀王の声に心を奪われた妃アヌパマーは、やさしい笑み・蔓草に似た眉を上げ動かすこと・流し目・甘え戯れることという〔女の様々な〕媚びのしぐさによってその王の心を虜にしながら、言いました。「王様、その孔雀王をつかまえるために、お骨折りいただけませんか。私たちの後宮で、〔彼を〕愛玩したいのです。

後宮の中に居る、彩り鮮やかな月輪〔の尾羽〕をもつその孔雀によって、私たちの宮殿の場所は、まるで種々の宝石の耳飾りをつけた〔貴婦人〕のようになるでしょう。」〔一二・一五〕

◇　王は答えました。「妃よ、あの方を捕まえるのは不可能だそうだよ。」―　すると妃は言いました。

「人間たちは、芳しいマダの滴りを流す大力ある雄象たちをも、激しい努力と知性を用いて服従させています。ましてごくわずかな力を起こす鳥たちなんて〔問題になりません〕。〔一二・一六〕

人間たちは水の中から、視界から逃れている魚たちをも、釣り針で釣り上げます。手段をもった人間に、達成できないことがあるでしょうか。強い決意があれば、行為は成果を得るのです。〔一二・一七〕

あなたは秀でた鋭い知性をおもちです。また沢山の助けてくれる賢者たちをもお持ちです。もしあなたが私の

望みを叶えられないなら、それはもう愛が〔私から〕離れているからです。〔一二・一八〕

母鳩は、巣にいる雛たちを〔火から〕守ろうとして、小さな羽で繰り返し川の水を取ってきては、森の火事の火焔の上に注ぎかけたそうです(7)。愛していれば人は自分の苦労など考えないものです。」〔一二・一九〕

◇「どうか怒らないでくれ、妃よ。お前のためなら、出来ないことでもやるよ。これから私は彼を得るために努力しよう」と、その王は言いました。

艶めかしい美しい女たちが陶酔的な愛へと引き寄せる、嬌態という投げ縄にすっかり心が縛られてしまった男たちは、善悪の行為の見極めにおいて理性が眠りこみ、奴隷ではないのに〔自ら〕隷属へと赴くのです。〔一二・二〇〕

有名なティロッタマーという名の天女はその肢体が神的な輝かしさをもっていたので、三界の主である三眼の神（シヴァ）すら、体のきれいな彼女ゆえに、自分の顔面を四つにしてしまいました(8)。〔一二・二一〕

愛の神（カーマ）は軽蔑をもって笑いながら、偉大な知性をもち苦行力を蓄積した蔵であるガーディ王の息子（ヴィシュヴァーミトラ）を、苦行林において、蓮根の弓を引き絞って、矢（射られた者に恋愛を生じさせる花の矢）で射たのです。〔苦行者の彼は〕メーナカー〔という天女〕により感官の制御を失うに至りました(9)。〔一二・二二〕

人からの軽侮をもたらす物乞いが世に盛んに行われることも、人の頭に『嘲り』という塵埃が降りかかることも、『侮蔑』という矢が心に突き刺さることも、―これらのことは男たちにおいて、女〔への愛執〕のゆえに引き起こされているものです。〔一二・二三〕

女たちに〔愛著し〕隷属した男たちは、『不撓の努力』という鎧を着こみ、『欲望』という軍隊を前面に配置して、『厚顔無恥』という非常に固い弓を強く引き絞って、『物乞い』という戦いの真っ只中に突き進んでゆき、卑しい輩どもから〔射かけられる〕『眉を顰められること』という〔屈辱の〕矢の傷を堪え忍ぶのです。〔一二・二

四〕

◇　さてかの王は鳥猟人たちを呼び寄せ、命じました。「ヒマーラヤにスヴァルナ＝アヴァバーサ〔金光明〕という孔雀王がおられるが、君らはすぐにその彼を〔ここに〕お連れしなさい。もし連れてこれなかった場合、諸君の全員を極刑をもって〔あの世の〕死王のもとへ送ることになろう。」―「承知いたしました」と彼らは死に怯えて答え、〔捕鳥術が〕最も巧みな、或る一人の鳥猟人に頼んで、〔その捕獲のために〕遣りました。その鳥猟人はやがてヒマーラヤにたどり着くと、その孔雀王のふだん行き来する場所を識別し、沢山の罠を仕掛けてから、一隅にひそんでいました。

雪山の高い山頂の、〔鳥が〕休める場所にその鳥猟人が設置したあらゆる罠を、その孔雀は遠くから強く凝視しただけで切断してしまいました。〔一二・二五〕

◇　その時ヒマーラヤにおいて遠方に居た、天眼をもつ聖者たちは、その菩薩の威神力をみて、驚いた心で、次の様に言いました。

「福徳の光輝を放っている、この美しく輝く者は、見つめただけで固く結ばれたあれらの沢山の罠を切ってしまわれた。この聖者が悟りを得られたなら、まさしく同じ様に、『智慧』という刀によって『煩悩』という輪縄を切っておしまいになるだろう。」〔一二・二六〕

◇　罠を切られて絶望したその鳥猟人は、合掌して近づいて、王が〔下した〕残酷なその命令をかの孔雀王に説明し、〔次のように〕懇願しました。

「命を絶たれることを恐れて〔寄る辺なく〕保護を求める者たちを救護してくださるお方よ、白い眼のきわをもつ〔孔雀の〕王よ、あなた様がどうか私たちの庇護所になってください。」〔一二・二七〕

貝の〔真珠層の〕切片のように真っ白な〔目の〕きわをもつ御眼によって凝視することにより、あなた様は輪

縄を切られました。あなた様はこのような威神力を持たれる方ですから、どうして私たちを救護できないことがありましょうか。」〔一二・二八〕

人が災禍に呑み込まれて苦しんでいる家族を見た時のように、憐れみを本性としてもつかの〔孔雀王の〕心は、苦しんでいるその男を見ると、〔同情の〕苦しみに満たされたのでした。〔一二・二九〕

それはあたかも、「この心堅固な者（菩薩）が生類を厄災から守らないことがどうしてあろうか」と、『戒波羅蜜』（『戒めの完成』という女性尊格）が彼のもとで、そう、疑いをもたずに〔共に〕立っているかのようでした。〔一二・三〇〕

「あなたが悟りを得ようと願い、私を捨てることがないのであれば、至高の孔雀よ、これらの者たちを王の懲罰から守りなさい。」―そう、『憐れみの心』という聖なる女性尊格が、『戒波羅蜜』が生じさせた心の清澄さをそなえたかの孔雀に、語りかけたかのようでした。〔一二・三一〕

◇

その時菩薩（孔雀王）はそれらの死を恐れる者たちに対して〔深い同情に〕苦しみ、次の様に考えました。

「もし私が甘美な声と燦めく羽毛をもってこの森林に生まれなかったならば、無慈悲な本性をもつ王のために、〔死の〕危難が鳥猟人たちにまで及ぶことがなかったのだ。〔一二・三二〕

こうして私のゆえに苦悩している、王から強要されたこの人々が破滅に至らないように、この者たちを死から守ってあげよう。〔一二・三三〕

〔私に〕原因があってもなくても、〔私と〕関わったために或る別の人が破滅することになった時、この私がもつことになる、無数の誹謗の矢に心が傷つけられた、そんな〔悩苦のある〕生は、もつべきではない。」〔一二・三四〕

◇

このように菩薩は考えてから、彼に言いました。「あなたは、私が来ることをかの王に伝えるため、先に行きな

さい。」

その鳥猟人は歓喜した心ですぐさま〔国に〕戻り、報告しました。「閣下、まさに今、私どもへの同情によってかの孔雀王が来られます。」――そこでかの王は妃や都民たちと一緒に、強い好奇心からその到着を期待して待ち、幾度も繰り返し虚空を眺めました。かの孔雀王は同行していた孔雀たちの群を慰め安心させて〔森に〕引き返させてから、蒼穹に舞い上がると、たちまち〔都城の上空に〕やって来て、生まれつき甘美である鳴き声により、ヴァーラーナシーのあらゆる人々を歓ばせました。

すると彼のその鳴き声を聞いて、「きっとあの孔雀王が来たのだわ」と思い、ある女たちは心悦ぶあまり、アンクレット（足環）の〔あわただしく〕鳴る音で鳩小屋〔の枝〕に止まっていた番いの鳩たちを怖がらせてしまい、またとても急いで〔小走りで〕出て来たため、耳に付けた花飾りが下にずり落ちてしまっており、――或る女たちは額中央の額飾りが〔塗りかけの〕未完成のまま、指先も朱で赤くしたまま〔飛び出してきた姿〕であり、――また急いで進むことを邪魔する重たい〔自分の〕お尻の嵩の大きさに不平をいいながら〔急いで歩き〕、少し進んだものの、他の或る女たちは目上の人々にじっと見られてきまり悪さに恥じ入って、〔そこで〕また急ぐ歩行を妨げられており、――また歓びのあまり睡蓮の花びらのような眼を大きく見開いているさまは眼のかどが両耳の端にまで届くかのようであり、――また他の或る女たちは途中まで描いた絵を放り出し、筆の穂先の寿命がほぼ尽きた絵筆たちを籠の中に投げ込んで〔部屋をとび出ると〕、白雲・雪・ジャスミン・蓮根・水晶・銀のように真っ白な漆喰の屋上に登りました。別の女たちは〔室内で〕窓際へと押し寄せました。

その時格子窓や丸窓に立って〔早く〕孔雀を見ようとはやる女たちの、大きく目を見開いた沢山の顔〔の出現〕によって、まるで沢山の月〔が出た〕かのように都城はとても明るく輝きました。〔一二・三五〕

好奇心から子供たちがあわただしく家から出て来ましたが、そのぼさぼさの『カラスの羽』（子供の左右の鬢）は

風に〔吹かれて〕乱れ、可愛い子鹿の目をして、やさしい母たちが見守るなかを、上を見上げていました。〔一二・三六〕

また綺麗な毬から[10]〔いつのまに〕生まれた遊戯を中止して、(a)美しい額にうっすら汗をかいている、(b)少し胸が膨らんできたことで上着がもちあがっている、(c)蔓のようにほっそりした腕をした少女たちが、〔家の〕表に出て来ました。〔一二・三七〕

「あれ、あれが孔雀よ」と、微笑んでいる顔が美しい、王宮の女たちの、(a)〔互いに〕教え合うために〔空に〕高く差し伸ばされた、(b)燦めく爪が宝石のように眩い、(c)蓮の花びらのように薄紅色をした、たくさんの指によって、まるでその都城は〔春の野に〕多くの若枝が芽吹いたかのように見えました。〔一二・三八〕

◇ あたかも〔空中で〕神々とアスラたちの戦争があったために、刀の刃で旗竿が切断されて、種々の宝石に燦めいている旗が〔空からまっすぐ〕落下してきたかのように、かの孔雀王はたちまち王の宮殿の中に降り立ち、〔その空間を〕美しく飾りました。

その時、珊瑚に似た〔赤い〕嘴と重厚な尾羽をもつその孔雀のもとに、人々の視線が一斉に注がれました。まるで財を喜捨している気前がいい一人の布施者のもとに、願いが叶うことを望む乞う者たちのあらゆる期待が全方位から一斉に注がれるように。〔一二・三九〕

王と王妃はその孔雀王を眺めて、望みが叶い、満足しました。それはまるで〔日常に飽きた〕不幸な疲れた心が、世の人々に得ることが困難な何らかの物を獲得した時、大喜びに喜ぶさまに似ていました。〔一二・四〇〕

◇ 歓喜心をいだいてかの王は、王者にふさわしい象牙の脚をもつ座席にその孔雀王を坐らせると、次に〔自らも〕一つの座に坐りました。すると菩薩は甘美な響きをもつ荘重な声で、次の様にその王に話しました。

「王よ、理性の力によって強力である官能に打ち勝たれることによって、また、乞う者たちの請願を何度も実現

に結びつけてあげることによって、海を外縁とするこの大地を、〔あなたの〕正しい行政によって、様々な罪悪を排して、久しくお守りくださいますように。〔一二・四一〕

どうか正しい教えから出来ている、〔民衆を導く〕あなたの『法』という橋たちを、ますます立派なものにしていってください。それら〔の橋〕に依って、あなたは底知れない深さの『苦』の海を越えることでしょう。〔一二・四二〕

大きな悪害をもたらすことが知られている、『感覚的享楽』という、捉えにくく、獰猛で、隙間〔を突くこと〕をねらっている蛇たちに、どうかあなたがひどく悩まされることがありませんように。〔一二・四三〕

善く訓育がなされた御家来、御令室、御令息の上に、そして王よ、名声の宝藏であるあなたのお体の上に、どうか幸と健康がありますように。」〔一二・四四〕

◇

王は語りました。

「孔雀王よ、利他行に巧みなあなた様のようなお方との出会いがない限り、人々は不幸せです。〔一二・四五〕

孔雀の王よ、〔ご覧下さい。〕黒雲の雷鳴として〔わが宮殿には〕充満する太鼓の音があり、〔雲を飾る〕稲妻として踊り子たちが〔宮殿の〕内部を飾っています。あなた様をお迎えすることで、私の宮殿は〔このとおり〕雨雲の時節（孔雀たちが悦ぶ雨期の初め）に似た姿になっております。〔一二・四六〕

愛する女の顔には額の飾印（ティラカ）があり、天空には月があり、また装飾品には澄んだ輝きを放つ一箇の浄い宝珠が付いているように、孔雀王よ、あなた様はこの大きな私の宮殿にとって美しい宝飾となることが出来る方として、長く待ち望まれておりました。」〔一二・四七〕

◇

このようにその王は鄭重なもてなしの言葉を語り、〔やがて〕宮殿の内側がランプの輝きで照らされる頃、―

『東方の空』という美女が『月』という鏡を手にする頃、―

『天空』という池が〔いちめんに〕現れはじめた『星々』という夜咲きの白睡蓮の群によって美しく飾られる頃、―『夜』の初更が到来した時、よい香りのする白睡蓮や若芽が撒かれた柔らかなベッドを、王は孔雀王のために用意させました。そして毎日、よく熟して柔らかい芳香ある果実を差し上げました。

時が流れて、ある時かの王は或る用務のため、菩薩〔の世話〕を王妃アヌパマーの手にゆだねて、あまり多すぎない軍隊を引き連れて、馬たちの蹄のくぼみが掘り起こした道の塵埃によって〔周辺の〕若芽や花や葉の叢りをすっかり塵灰色に変えて森の中の景色を変化させながら、―

(a)浄らかな水を流す川の岸に〔生えた〕籐の影にひそんで動かないサギやツルたちに見つめられている、戦慄するシャパリー魚の群の乱れ泳ぐ岸辺の水があり、また(b)急いで進む〔沢山の〕車輪が立てる音に驚かされて鳴き声をあげる番いのオシドリたちの逃げ去ってゆく白い砂浜がある、あちらこちらの〔幾つもの〕川を眺めながら、―また恐れた羚羊たちが跳躍しながら横に逃げ去った後、あたりの四方の空間そのものがまるで〔怯えて〕震える沢山の眼に充ちているかのようであるのを見ながら、―

(a)〔道に〕若木の徒長枝が伸びてきては牛の群に歯で噛み切られている、(b)また〔道の両側の〕サトウキビの林によって〔通行が〕妨げられている、多くの村々の境界を越えて、〔王は〕或る一つの地方に去って行きました。

その頃、水牛の角のように黒い豊かな髪の房束に包まれた顔、そして真っ白な肢体をもつかの王妃は、長い睫毛のラインのある彼女の〔放つ〕眼からの視線を、窓から遠く伸ばして、一人の〔道を〕進み行く遊蕩児の上にずっと止めていました。〔一二・四八〕

この札つきの遊蕩児は、〔男の〕眼を悦ばせる、美しい眼をしたその〔妃〕を見ると、壁の近くに行きました。彼女は〔その彼の〕横を向いた顔や姿を幾度も繰り返し眺めた後、震えながら、耳につけた芳しい青睡蓮を、彼の体の上に投げました。〔一二・四九〕

その男はその花開いている一輪の青睡蓮を取ると、香りを嗅いで、もだえるかのような荒い呼吸をしながら〔それを〕頭に挿し、日が沈むと、〔帰ることに〕気の進まない男はやっとなんとか歩き始めましたが、彼女の目はそれをずっと追っていました。〔一二・五〇〕

その遊び好きの若者はそれから娼楼に行き、ひどく面白くない気持ちのまま寝台に案内されましたが、愛神の矢に射られたことがため息からもわかる有様で、落ちつきなく、好んであの〔王宮の〕女について熱い思いをめぐらせました。〔一二・五一〕

遊女はからかいの笑い声をあげて、遊蕩児に言いました。「私には今、旦那様が虚ろになっているように見えるわ。」―するとこの与太者は、本当の気持ちを隠して、言いました。「賭場で負けたから、それで俺は面白くないのさ。」〔一二・五二〕

◇　その夜〔の過ぎ去るの〕を百年であるかのように思いながら、あの女のことばかり考えていたその遊蕩児は、〔翌朝〕起きると、或る親友に密かにその出来事を話して聞かせました。「友よ、聞いてくれ。昨日俺はこんな経験をした。『王様のあの第一王妃は、まばたきをするという、その点だけによって〔天女ではなく〕人間の女である〔とやっと知りうる〕』と、世の人々によって〔その美しさが〕語られている。その女が婀娜っぽく見つめながら、耳もとから〔そっと〕抜き取り、

窓に寄りかかったまま、一本の青蓮を俺の上に落としてくれたのだ、〔あの〕艶やかな女が、―笑みにより燦めく宝石のような歯の光線を輝かせる、蓮の眼をもつ女、無比なる美貌をもち、アヌパマー（『無比なる女』）の名をもつ女が。〔一二・五三〕

(a)窓の前に現れた月のような顔をもち、(b)宝石のような歯の輝きは月の光輝も凌ぐ、(c)華奢な体をしたあの女は、コケットなしぐさで動かしてみせた『眉』という弓により、『視線』という矢を俺に向けて放ったのだ。

〔一二・五四〕

◇　だから今とりあえず、逢曳の手段を考えなければならん。」

するとその親友は大笑いして言いました。「時には『カラスの頭に落ちた椰子の実』[11]〔の諺〕のように、単なる偶然としてこんな事が起こりうるものだ。彼女が何気なく何かを眺めている時に、ちょうど君が王の宮殿の壁の近くにやって来た。すると自然に耳もとに挿した青蓮が君の上に落ちたのだろう。だから君は遊女や遊び人たちの中に来て、〔わざわざ〕自分を笑いものにするようなことはするな。こんな非現実の妄想は捨てるがいい。仮にもし王の第一妃が欲望をいだいて君の上に耳の睡蓮をわざと落としたとしても、そんな熱望をいだくことはやめておけ。なぜなら、手が届かない所にいる好きな女との逢曳の手立てを〔あれこれ〕考えることは、男にとって大変な苦悩を引き起こすものだ。それは〔君の〕睡眠を奪い、体を衰えさせ、食欲を失わせるだろう。〔その時本人の〕ためになる言葉が語られても、親友たちの忠告をもう喜ばなくなる。まるで直近に降った雨で増水して暴流と化した川が岸辺の蔓草たちの根っこを掘り崩すように、〔生活における〕法の安定的な維持を土台から崩してしまう。〔世間の〕楽しく快いことすら、憎むようになる。善良な人々の美徳の話に腹を立てるようになるその〔思考〕は、しかし冷静な判断の力によって、完璧に消滅へ導くことができるものだ。」

その遊蕩児は答えました。「沢山の浮気女たちの尻に触ることに長けた知性をもっている、俺のようなやくざな男が、いったい女が欲しがっているのか、欲しがっていないのかを、分からないと思うかい。友よ、聞け。〔女たちが見せる〕耳をさすること、胸元を見せること、恥ずかしそうに視線を逸らすこと、笑むことなどの振舞は、女の心が欲望をいだいていることを示すものだ。この場合、どうして疑う必要があるだろう。」

友は言いました。「もしそうだとして、鳥の王様のように城壁を跳び越えて、君が夜中に王の宮殿に入ったとしても、しかし〔逢曳の〕約束をしていないなら、君が〔夜中に〕目覚めさせた、其処にいる王妃が、

眠気が消え去った、ひどく動揺した蓮の眼で〔見つめ〕、体を震わせ、腰から衣を滑り落として、『あなたは誰』と言いながら、まるで虎を恐れる牝鹿のように恐怖することになる。〔一二・五五〕

◇　そしてもし侍女たちが大騒ぎし、侍従長も目を覚ました状況に宮廷がなれば、〔君の〕この行為はすべてがおしまいだ。そう俺は見るね。」

このように彼らが一緒に思案し合っていると、

(a)ゆっくりと歩を進めながら揺れて〔鳴る〕アンクレットをつけた美しい蓮華の両輪のような両足をあたかも大地に敬意を示そうとするかのように接地させる〔優雅なしぐさ〕によってまるで演劇のような歩き方を示す〔女〕、(b)震える鹿の目と〔美しさを〕競うその眼は、婀娜っぽさを湛える目つきによってその二倍も美しく、しかも〔目尻が〕耳と親しく接するほど〔大きな〕眼であるために〔その横で〕恥じ入って少しうつむいているように見える一輪の青蓮の花をその耳に留めている、(c)また大きな真珠のネックレスの宝石の輝きによって照らされている重たげな乳房をもち、(d)まるで月だけが雲なく皎々と輝いている『月夜』そのものが〔地上に人として〕肉体化したように見える、(e)また暑さからうっすらと生じた〔額の〕微細な汗の粒々の列なりが額飾りの先端を浸していて、(f)〔頭につけた〕格別にきれいなバクラの花環に髪の房束が〔うずたかく〕満ちており、(g)また手から緩んだ腰帯の紐をだらりと垂らし、(h)孔雀の尾羽の月輪の中央にある群青の色をした上着をつけている、(i)また大きく深い臍穴の奥をのぞき込もうとしているかのように〔流れる〕細くて青黒い一筋の体毛が『三条の皺』〔臍の上にある三条の横の皺襞〕の上を波のようにうねってその飾りをなしている〔艶美なる〕腹部をもち、(j)また真昼の時の〔降りそそぐ〕太陽光に抱きしめられているかのように見える赤睡蓮の花環をつけ、(k)歩いて疲れたせいで少しけだるそうな、華奢でほっそりした体つきをした、(l)樟脳の芳香を漂わせるビンロウジ（檳榔子）に染められた赤い下唇をもち、(m)熟したラヴァリーの実のように真っ白い頬の表面に葉の装飾文様の化粧をしている、(n)まるで〔地上に〕肉体を得

たラクシュミー（美と繁栄の女神）のようであってラクシュミーヴァティーという名をもつ、(o)無比の美貌をもつ王妃アヌパマーによって派遣されて来た、(p)言葉に巧みであり、(q)〔姿は〕巧みな職人によって作られた黄金の〔女神〕像のようである、使者である女がやって来て、彼ら二人の遊蕩児に挨拶をしてから、腰を下ろし、二人に隔たりの無い親密さを示しながら、打ちあけて隠さずに王妃の事を話しました。

「花の弓をもつ神（愛神カーマ）に似た方よ、私の友人である王妃アヌパマーは宮殿の一隅に来られたあなたを見た時以来、頬杖をついているその蓮のような顔はやせ細り、青白くなっています。〔一二・五六〕今やひどく痞せ、アムリナーラ軟膏のように白くなり[12]、〔健康の〕安定を失った体をもつに至った私の女友達（王妃）の心を、親しい方よ、愛神（カーマ）は止むことなくあらゆる〔恋の〕矢をもって射続けているのです。〔一二・五七〕

愛（愛神）によって痩せた彼女は毎日、〔火照った〕体から生じた熱により[13]、花の褥を暖めています。美しい林苑を眺めながらも、楽しみません。まるで群を離れた雌鹿のようです。〔一二・五八〕

(a)こうして花の弓をもつ神（愛神）の矢に体を射られてしまって、(b)絶えずため息をついているために頬がわななき、(c)恥じらいのために顔を下に向けている、(d)美しい体つきの、あの女友達を、まずは今〔あなたの〕言葉で喜ばせてあげなさい。」〔一二・五九〕

◇　その女使者が話し終えると、彼の友達は笑いながら彼に言いました。「確かに、マンゴー（愛神が宿るとされる樹）の花房が開花する春の季節は、雌のカッコー鳥（愛神の乗物獣、マンゴーに巣を作る鳥）と取り合わせになっているものだ。みごと君の願望は成就したね。」

その遊蕩児は尋ねました。「女友達である方よ、〔今や〕完全に私の願いが実現しました。まずどの場所、どの時間に、私はアヌパマーと逢えばよいのかを教えてください。」

女使者は答えました。「人々が眠ったほぼ真夜中に、外の城壁の近くに生えているニヤグローダ樹に登り、王の宮殿の壁に接している歓喜園の上にその樹が伸ばしている枝を〔伝って中に〕下りてから、其処で、友〔であるあなた〕は池の岸辺にある綺麗な色をした東屋に居る孔雀王スヴァルナ＝アヴァバーサのために食物と水を運んで行くという口実のもとに〔やって来た〕アヌパマーを、自分の体を享楽する女として長く、悦ばせてあげなさい。」

遊蕩児は言いました。「親しき方よ、私の言葉として、次の様にアヌパマーにお伝え下さい。」

「あなたが耳元から取って私の上に投げてくれた黒い青睡蓮は、命のようにいとしいものです。萎れてしまっても、それを私は捨てることはできません」と。〔二二・六〇〕

◇「そういたしましょう」と言ってお辞儀して、〔妃の〕言葉を運んできたその〔女使者〕が立ち去った後、真夜中の刻限が来ると、

(a) 黒分の半月の時期の暗い闇に覆われて人に見られにくい路の間を、――眠る象のいびきが聞こえてくる繋柱がある象舎の間を、――夜の初更〔の見張り〕を勤めた者たちから起床を命じられて二更の夜警に就いた一隊の兵たちの間を、――枝の上で身動きせずに鳥の群が休んでいる多くの鳥の巣がある樹々の間を、立つ杭一つを見ても目の前に人がいるのではないかとびくつきながら、(b)よい香りがするおしろいを塗り、(c)雨期の始めの雨雲のような黒い布に身を包み、(d)帯の左に鋭い剣を差したその遊蕩児は、かの親友と一緒に近づいて来て、「また会おう」と親友に告げると、女使者が指示したやり方に従って、〔王宮の〕歓喜園へと侵入しました。

その時彼がやって来たのを眺めながら、格別なおめかしをしたアヌパマーは考えました。「あの人がニヤグローダ樹のあの枝を伝って下りてくる時、必ずあの孔雀に見られてしまう。あの〔孔雀〕はいつかこの出来事を、戻った王に話してしまうかもしれない。だから毒を混ぜた食事で、あの孔雀を〔この世から〕消し去ってしまおう。」――そう考えると、

彼女は、愛の欲望と不安とで自分を抑えられなくなって、孔雀に毒を混ぜた食物と水を与えました。〔一二・六一〕

美徳と敵対する快楽を切望するあまり、罪への恐れが消え、惑乱状態になって自分を見失うなら、羞恥心がなくなって愛欲に溺れた人は、してはならない事をしてしまうことがどうして無いでしょうか。〔一二・六二〕

◇　かの孔雀王は食事と水が少しぴりっとする味であるのを感じて〔考えました〕。「きっとアヌパマーがあの男との愛欲の行為を欲し、〔知られることに〕恐れを生じて、私に毒を盛ったに違いない。とすれば、これはよい機会である。

愛欲によって理性が盲目になっているこの男女が今まだ深い関係に至っていないうちに、〔ここで〕悪い路（悪い生き方）を滅ぼす法話を説き聞かせて、この二人を離欲に導けるよう、私は努めてみよう。」〔一二・六三〕

◇　こう考えると、かの偉大な方（菩薩）は、その遊蕩児に呼びかけました。「よき若者よ。ここに坐って、私との語りを楽しんだ後、よいと思ったとおりに行動したらどうか。」

するとその遊蕩児は好奇心に駆られて近づき、孔雀王のそばに坐りました。かの王妃はその〔孔雀王〕をちらりと眺めながら、怯えて黙ったままでいました。そこで菩薩はその腰を下ろした二人の前で、次のような離欲につながる話をしました。

「『ああ、月のような顔は、笑みという月光が凝り固まったように美しい。婀娜っぽいしぐさと、高くもちあがった両乳房は〔なんと〕魅力的か。』―そのように、男が愚かに惑って、正しい思考を失い、他人の妻の容姿を思う時、愛神（花の弓をもつ者）が〔彼の〕内部に入り込んでいる。〔一二・六四〕

『こっそり腰布をゆるめようとする私の手を押しとどめながら、このように彼女はうぶな恥じらいによって顔をうつむけるだろう。』―このように、女と交わるための様々な妄想を膨らませることばかりで心が盲いてしまっている男のその身体を、中にうまく入り込む隙を見つけた愛神は、日に日に痩せさせてゆく。〔一二・六五〕

『今日彼女はまた来てくれるだろうか。長上の者（夫や親）〔に気づかれること〕を恐れているから、彼女の来訪がどうしてありえよう。むしろ夜中に人が寝入った頃、怯え震えながら私が行くのがよいのか。女使者〔が来るの〕も、今日はずいぶん長くかかっている。あの女はいったい気が進まなくなったのだろうか。』―このように〔次々に〕生じてくる様々な思案によって頭がかき乱される愛する男にとって、そんなことは幸せといえるだろうか。〔一二・六六〕

『欲望の思考』から『愛の焔』が生まれ、そこから『熱い苦しみ』が生じる。『熱い苦しみ』から『悲しみ』が生じて、『正しく意識を払うこと』を滅ぼす。『正しく意識を払うこと』が無くなれば、『愧じる心』がどうして有ろうか。『愧じる心』が無くなると、〔世間からの〕非難が有ろう。『軽蔑』という苦痛を与える矢に心を射貫かれて、苦悩をかかえた男女二人の心が、いつ幸せになれるというのか。〔一二・六七〕

(a)官能に支配され、(b)「〔これが〕快楽だ」との思いに〔心が〕惑わされている、(c)欲望に苦しめられ、(d)羞恥を失い、(e)人の妻を欲している人々は、〔次世において〕地獄の中で〔恐怖のあまり〕身震いを起こし、焔と火花に充ちた〔灼けた〕鉄製の女が抱きついてくるのにどうして堪えられよう。〔一二・六八〕

このように、「他人の妻に強く愛着することは多大な悪害をもたらすものである」と賢者たる者は理解して、堅固な心を保ち、『〔彼女は〕姉である』との想いをなして、それ（人妻への執着）をやめるのです。〔一二・六九〕

◇　このように、〔今世の〕わずかな快楽の代償として、(a)幾千の火焔に包まれて眼が〔焼かれ〕窄まって閉じた或る悪行者たちの苦しむ叫び声が痛ましい〔地獄〕、(b)鋭いのこぎりで頭骨を切り割られている他の者たちの流す血の迸りが灼ける大地の上に振りまかれている〔地獄〕、(c)残忍なヤマ（閻魔）の獄卒たちが振り下ろす鉄のハンマーによって打ち砕かれて〔絶えず〕粉々にされている或る人々の体の骨が立てる音の響きが恐ろしい〔地獄〕、(d)鉄のシャールマリー樹の棘によって〔体を〕切り裂かれながら繰り返し絶叫している他の者たちの山積みとなって

充満している〔かの〕地獄へ、愚か者たちが堕ちることを願うとすれば、ああ、その無知は何と大きなものか。」

その時、その遊蕩児はかの孔雀王によって地獄の話がありありと説かれるのを聞いて、心が戦慄し、人妻への欲望を失って、言いました。

「ああ、絶えず恐怖をかき立てる、その地獄の有様についての話をあなた様が語られるのを存分に聞きまして、私は轟音を立てながら地獄の火が燃え上がるのをまざまざと見るかのようです。〔一二・七〇〕

それゆえ、今日から後、(a)愛欲に盲目になった人の心を夢中にさせ、(b)善い世界への門を閉ざしてしまう、人妻に対して、〔母や姉の如き女として〕敬い拝むことにいたします。〔一二・七一〕

善行と不善行の道（生き方）をお話しになって、〔今〕決断すべきことを明らかにしてくださいましたあなた様を、軌範師（阿闍梨）のごとき〔私の〕指導者であると見做すことにいたします。〔一二・七二〕

愛欲という〔盲目の〕闇を離れた私は、夫婦の誓い（操）を未だ破っていないこのお妃様を、〔以後は〕姉であると思うようにいたします。」〔一二・七三〕

◇　その時アヌパマーは、「姉」という彼の言葉を横で聞いて、〔自身を〕ひどく恥ずかしく思い、また菩薩による法の説示を聞いて、心が戦慄して、次のように話しました。「(a)欲望・愛欲の力に負けてしまい、(b)悪い運命を得て、(c)地獄に行く女である私は、〔先ほど〕この孔雀の姿をした偉大な聖者様に、毒を混ぜた食物と水を与えてしまいました。それゆえ今、私はどうしたらよいのでしょうか。」

菩薩は彼女が心から悔いているのを見て、元気づけました。

「『慈しみの心』という真言によって、私の体は常に呪文に守られています[14]。たとえ猛毒ハーラーハラ（乳海から生じた神話的な猛毒）であっても、害を与えることは出来ません。〔一二・七四〕

王妃よ、私の死についての心配はなさらないでください。また、このたびのことを、私は王に決して語りませ

ん。」〔一二・七五〕

◇　アヌパマーはその言葉を聞くと、とても満ち足りた喜びを味わいました。またかの遊蕩児もかの孔雀王に別れの挨拶をなして、〔辛くも〕姦通という災厄から脱した彼は、同じニヤグローダ樹を通って自分の家に去って行きました。

さて夜明け頃にブラフマダッタ王は自分の王国のための用務をやり遂げて戻って来て、自分の宮殿に入ると、真っ先に孔雀王のもとに行きました。王と孔雀王はお互いの無事と安寧を尋ね合いました。そののち或る日、孔雀王は王に次の様に語りました。

「〔わが〕孔雀の群は、私の不在によって気落ちし悲しんで、水も飲まず、果実も食べず、雨期が来ても舞いをすることなく、確かに混乱状態に陥ってしまっています。〔一二・七六〕

このため、人の王よ、あなたはどうか官能という〔内なる〕敵たちに打ち勝った者として、この大地すべてをお護り下さい。私はあなたの同意を得て、孔雀たちを護るため、月のように白く輝いているヒマーラヤへ立ち去ります。」〔一二・七七〕

サファイアの光彩を放つ頸をもち、長く綺麗な尾羽をそなえた、〔孔雀の〕群の守護主たる彼がこのように語った時、王はしぶしぶながら〔彼が〕壮麗な都城から立ち去ることに同意しました。〔一二・七八〕

強い愛慕の気持ちをもって、王とその都の人々が見守るなかを、その偉大な孔雀は、孔雀たちの利益を願う故に、雨雲に覆われた空へと〔飛び立って〕行きました。〔一二・七九〕

長い尾羽のためゆっくりと〔飛ぶ〕、心を奪う美しさの孔雀王を空に眺めて、後宮の女たちは、慕わしさにいっぱいになり、目から涙の滴りをこぼしました。〔一二・八〇〕

心の固さを突き崩す〔ほどの〕激しい『愛する者との別離』において、理性と目〔の両方〕を覆い〔曇らせ〕

ながら、〔溢れんと〕大きく盛り上がったその涙は、〔去り行く者に〕愛惜をいだく人の『苦しみ』が、形あるものとなって、『切望』という火の熱によって〔溶けて〕、液体になったものに違いありません。〔一二・八一〕

その後、尾羽と頸を動かしながら遠くから虚空を進んでくるかの孔雀王〔の姿〕を見た時、『甘美な声〔をもつ鳥〕』〔と呼ばれるとおり〕、孔雀たちは甘美な鳴き声を発して、羽をばたつかせながら歓喜し、出迎えました。〔一二・八二〕

孔雀王が国王のもとからその地に戻って来た時、まるであらゆる願いを達成し終えた有徳の親友が戻って来たかのように、雪山（ヒマーラヤ）は嬉しげに『雪』という白い笑いをまき散らし、また『若芽』という体じゅうの毛を逆立てることにより、その歓喜を示すかのようでした。〔一二・八三〕

◇　菩薩は長い別離のために〔再会を〕切望していたその孔雀の群に近づくと、両の翼で包み込んで、慰めました。

―　さあ、このように、菩薩であった世尊が自身の身を危険に晒して生き物たちを命の危険から護られたことをよく考えて、あなた方は、善い世界（善趣）への再生の門を照らす灯明である『戒』（道徳性、戒め）を篤く敬うべきです[15]。

『孔雀ジャータカ』、〔第二部類の〕第二話〔終わる〕。

## 第一四話　シュヤーマ・ジャータカ[16]

父母、それは幸せという収穫を生じさせ、大切にすれば恵みを授ける畑です。もし人にそのことの理解が生じるなら、彼らを〔心の〕依り処として仕えることでしょう。〔一四・一〕[17]

◇　次の様に伝え聞いています。―　大地のあらゆる栄光が一つに集まった地、ヴァーラーナシーにおいて、政略

と威光と広く知られた剛勇〔という三種の力〕をそなえ、民衆の利益と損害を正しく観る方である、ブラフマダッタという王がおりました。かの〔王〕のもとに、(a)ヴェーダやスムリティ（聖伝文学）の真義を理解し、(b)おのが職務の遂行により輝かしい誉れと名声を得ており、(c)あらゆる論書に通達した、一人の人物がいましたが、それはまるで神々の王（インドラ）には神々の師（ブリハスパティ）が仕えているが如くでした。

〔その者は婆羅門として〕深く尊敬されているがゆえに神聖で寂静なる光輝に包まれているかのように見える、老熟と深い学識によって最高に勝れた、プローヒタ（宮廷祭僧、王室付き祭司長）でした。〔一四・二〕

〔彼を包む〕『聖なる光輝』はあたかも、「あまりに素早くこの『老い』はこの方を死のもとに連れ去る」と、怒りをもって彼が得たその『老い』を見るかのようでした。〔一四・三〕

菩薩（釈尊の前世）は、息子がほしいと願ったその彼の息子として生まれました。名をシュヤーマカといい、堅固な道徳心（戒）が〔その人柄を〕飾っていました。〔一四・四〕

彼は浮動する『感官』という波に揺れを生じない、捷く動く『精神』の船に乗って、『学問』という海の彼岸（奥義）に至りました。〔一四・五〕

月のように美しく、また心の本性からやさしい言葉を語る者であった彼には、あらゆる所に親しい立場に立つ友人がおり、中間の〔様子見の〕立場や、敵対する立場に立つ人はいませんでした。〔一四・六〕

規律の諸法を堅く持し、あらゆる人々について〔称めるべき〕善い徳質を語る彼を、〔初め〕敵意をもっていた者たちも、敵意をもつことから免れるべき〔尊い〕方と見なしました。〔一四・七〕

◇　さてその偉大な心の方（菩薩）の父と母は、加齢のため体力が衰え、強度の白内障により視力を失いました。そこでかの宮廷祭僧（菩薩の父）は王のもとに行き、告げました。

「閣下、〔ついに〕視力が失われた私は、妻と共に苦行林に退くことを望みます。それ故、『徳性』という宝石

〔を蔵する〕海であります、私のあの息子を、プローヒタ〔の職位〕に灌頂なさってください。〔一四・八〕

『家住期』〔社会と家のために働く生き方をする人生の一時期〕は、青春の第一期においても、不放逸の原因になるため、賢者にとっては適しているものではありませんが、まして、記憶を滅ぼし、心を妨げ悩まし、感官の鋭敏さを損なう、仇敵のごとき『老い』〔の時期〕においては、〔家住期が適さないことは〕いうまでもありません。〔一四・九〕

◇　また閣下は、苦行を達成しようと願う私の妨げをなされるべきではありません。閣下は〔次の点を〕ご考慮ください。

一人の人物がもし穢らしい仕事をしようと願っているなら、親友は〔それを〕阻止すべきです。しかし彼が如法の〔正しい〕行為をしようとしているなら、〔親友は〕益を願って、励まさねばなりません。〔一四・一〇〕

◇　その時かの王は、その宮廷祭僧が苦行林に行くことを希望したため、まるで〔自分の〕父であるかのように、悲しい落胆から生じた涙を目にいっぱい溜めて、シュヤーマを呼び寄せると、次の様に言いました。「あなたのあの御両親は苦行林に行くことを希望している。それ故、あなたは我々からプローヒタの職位を受けてもらいたい。」―その時シュヤーマは暫しうなだれたまま、次の様に、心の中で自分への誡めを行いました。

「〔わが〕『心』という象よ、ちっぽけな快楽を強く願う者よ、どうしてお前は、苦の原因であるこの『渇愛』という雌象を追いかけるのか？『自足』という山を喪失して、〔森の外に迷い出た〕お前を、不善の人々のもとで〔受ける〕『侮蔑的なあしらい』という突き棒が苦しめることだろうに。〔一四・一一〕

〔これまで〕花開きつつある『徳性』という昼咲きの蓮が咲き乱れる『賢者たちの話（教え）』という寂静なる蓮池の中に浴していたのに、どうしてお前は〔今や〕『悪徳』という抜け出し難い泥のある、『人に仕えること』という深くて恐ろしい河の中へ入って浴しようと欲するのか。〔一四・一二〕

〔わが『心』という象よ〕、もしお前が力のある〔象王〕として、誤った道に迷い込む移り気な『感官』という象の群を完全に守ってやるなら、その時『悪徳』という鉤棒（象を操縦する棒）によって傷を与える、『感官の諸々の対象』という下劣な象使いたちが、お前を悩ますことはないだろう[18]。〔一四・一三〕

〔わが『心』という象よ〕、輪廻の道を歩むことの疲労を消してくれる手立てである、とても澄んだ『聖人たちの教え』という水に〔せっかく〕浴しながら、分別を失った者よ、どうして〔お前は〕自分を大切にする者たちが避ける『〔世俗の〕卑しむべき行為への愛著』という塵埃を、〔わざわざ〕自分の上に振りかけようとするのか。〔一四・一四〕

〔わが〕『心』という象よ、〔もうこれ以上〕多言を要するまでもない。輪廻を断ち切ることを目的として、賢者たちによって久しく楽しまれている苦行林での安楽をもしお前も楽しむことを欲するなら、〔次の〕生存の束縛に導くものである『願望』という強力な鎖を断ち切って、〔心の〕勇健さを失わせるものである『享楽への愛著』という繋柱（象を繋ぎ止める柱）を引っこ抜くがよい。」〔一四・一五〕

◇　このように心中で〔自分への〕誡めを行ってから、彼は王に語りました。

「大王よ、この『家を営む世俗の生活』（家住）とは、闘い・諍い・敵意の〔生じる〕温床であり、『罪業』という無数の蛇たちがいる蟻塚のようなものです。〔それは〕自分の身内への愛情の枷から苦行林へ赴くことを妨げるものであり、偽りの言葉たちの発生源です。〔それは〕人への隷従や物惜しみを生じさせるものであり、至福への道の障りです。たとえば海が多量の水を持っていても決して満足しないように、〔家住をなす者は〕莫大な財産に満たされていても決して満足しません。〔それは〕『感官の諸々の対象』という投げ縄によって、劣弱な精神をもつ者たちの心を〔搦め取って〕縛ります。

〔家住者は〕もし幸運が尽きるなら、豊かな暮らしは消滅するでしょう。遂には家長も汚い襤褸を身に纏うでしょ

う。母たちは飢えによってやせ衰えて泣き声をあげる幼い子供らにじっと見つめられるでしょう。穀物倉に穀物が空であるために使用人たちは意気消沈し、家の門に客人たちが再び訪れることもないでしょう。〔これらの事は〕いかなる心ある者の心臓を震撼させないでしょうか。またたとえ、この『家を営む世俗の生活』が最高の幸福感を生む原因になるものであるとしても、それでも、苦行林に行きたいとしきりに願っている盲目の両親を捨てて、私がプローヒタの職務に専心するということは、適切ではありません。

目が見えず、森に居て、飢えと喉の渇きのために痩せ細った、あれらの私の両親に、私でなくて一体誰が、看護的配慮をもって水や果実を与えるのでしょうか。〔一四・一六〕

「水晶のように澄んだ水を湛えて、川がこの近くに流れていますよ。濃い影を投げて道に立つこの樹が、〔あなた方〕旅人たちの〔憩いの〕ために役立ちます」― そう言いながら、行路に疲れ果てた私の両親を労りつつ話しかけてくれる、憐れみ深い人が誰かいるでしょうか。〔一四・一七〕

もしプローヒタの職にある幸せを希望して、私が家に留まった時、どこかの誰かから「御両親は道から逸れて、坑の中、あるいは山の斜面に落ちてしまった」と聞かされたなら、〔その後〕私はこの人生を、『肉体』という獄に繋がれたまま、どうやって過ごすことができるでしょうか。それ故、大王よ、私が両親と共に去ることをどうか止めないでください。」〔一四・一八〕

◇　その王が去ることを許したので、シュヤーマは両親を抱き支えながら、別れから生じる苦しみに高まり溢れた涙に目を曇らせつつ後をついて行こうとする親族や友人たちに〔謝して、家々に〕引き返してもらってから、―

(a)鹿たちが〔絶えず〕噛み切ることで不揃いになったクシャ草の葉と茎の先端に〔覆われて〕暗い緑色になった地面や、(b)また太陽光線の熱苦が生じさせた〔苦しい〕呼吸にあえいで頸を揺らす孔雀たちが坐っている木蔭のある、(c)また猪たちの鼻に掘り返されたムスター草によって覆われた池の岸辺にうずくまる番いのサーラサ鳥（鶴の

一種）の鳴き声が響く、(d)カルダモン（小豆蔻）を毀した時のような芳香がある象の発情液の香りによって匂いがつけられた〔林の〕内部の空間があり、(e)風によって吹動される様々な花が開いた蔓の上にブランコに乗る様に止まっている蜜蜂たちの群の歌うような羽音の〔聞こえる〕、閑かな森へとゆっくり入ってゆきました。

盲目であるかの両親は、でこぼこの石が邪魔する森の道を歩みながら、あちこちで躓きましたが、そのたびに、まるで非常に鋭い毒が傷口を襲うように、同情の故に感じやすいその〔息子〕の心を苦痛が襲いました。〔一四・一九〕

◇　菩薩（シュヤーマ）は〔石の〕でこぼこのある土地の上を〔二人を〕肩に担って運び、或る樹の根元で両親に食事をさせてから、また起ち上がって〔出発し〕、午後になって一本の道に出ましたが、〔そこで〕(a)或る一人の、たまたま通りかかった、(b)パラーシャ樹の葉で額を覆っている、(c)異様な（正体の分からぬ）外見をした、(d)両肩に矢の入った矢筒をくくりつけ、(e)ひどく窪んだ目と頬をもち、(f)少しごわごわの赤褐色の髪と髭をまばらに生やし、(g)孔雀の尾羽の目で作った耳飾りをつけ、(h)鉄柱のように真っ黒な甲冑を着て、(i)知らない森の出来事は何も無い者である、森の住人に、〔菩薩は〕尋ねました。「〔そこなる〕瑞顔のお方よ、いずれの場所に苦行林はありますか。」

その男は恭しくあいさつして敬意を示すと、彼に弓の先端で〔方向を〕示しました。「聖者様はどうかご覧ください。あの地において、―

一人の苦行者の子が、顔を急に上にあげ、熟して黄色くなった、半分に切られたモモタマナ〔の果実〕を石の上に置いてから、アーシャーダ（儀式用のパラーシャ樹の棒）を持った手をふりあげて、葦の座からそっと立ち上がり、〔少し離れた場所で〕両足を腹につけてニーヴァーラ稲（野生種の稲）の穂を盗み食いしている一匹の鸚鵡〔がいること〕を母親に伝えています。〔一四・二〇〕

◇　あの地が苦行林です。それ故、御両親を伴われた聖者様は苦行力の増大のため、〔其処に〕お行きください。」「そうします」と〔答え〕、シュヤーマはその森の住人に祝福を与えてから、苦行林に入りました。

〔其処で〕或る苦行者は彼に水を、また別の苦行者はおいしい果実を、また或る苦行者は「よくいらした」と言いながら黒羚羊の毛皮を与えました。〔一四・二一〕

気高い人が法〔に適う生き方〕を願うなら、久しく森林にいようと、家に居住していようと、〔それぞれ〕財に応じて、客人をもてなさねばならないのです。〔一四・二二〕

芭蕉樹の茂みによって暗い色合いをした（シュヤーマ）、その苦行者たちの棲む隠遁所（アーシュラマ）を眺めて、明るい（アシュヤーマ）心をもつシュヤーマに、〔ここに生きることへの〕熱望が次のように生じました。〔一四・二三〕

「(a)〔この土地の〕隅のほうに群生する蓮の茂みがあり、(b)日に三度、ギー（澄んだ牛酪）の供物を捧げた煙の臭いが漂い、(c)いたるところ、坐り、立ち、歩き回る鹿たちがいて、(d)輪廻的生存を滅ぼす道（涅槃への道）に導く原因として在るものである〔苦行林〕、――〔一四・二四〕

(e)〔心の〕鎮まった、輪廻的生存を滅ぼさんと願うヨーガ行者たちが住む木の葉造りの小屋がある、この苦行林は、愛神（カーマ神）すら、弓を捨てて、寂静を求めて入居を願うに違いない。まして最上の人々がそう願わないわけがあろうか。」〔一四・二五〕

◇　その苦行者たちと一緒に其処で一晩を過ごした後、夜が明けると、世を遠離した生活の安らぎを求める菩薩は、その苦行林から離れた所に、広く心地よい木の葉の小屋を作りました。

自ら尊師（グル）としての自性をもちながら、尊崇の心をもって両親（グル）を世話する彼は、火に供物を捧げつつ、精神は広大で堅固で気高く、身内と他人に平等な心を持って、諸々の苦行を習得しながら、その庵で多

くの年を過ごしました。〔一四・二六〕(19)

◇　或る時、かの偉大な心の方（菩薩）は、山の森の中から花と果実と薪とダルヴァ草を採ってきて、木の葉造りの小屋の床に泥土を塗り終えると、手足を洗い、水甕を手に取って、子鹿たちと連れ立って歩いて、おびただしい葦や蔓や蔦に覆われた岸辺のある、水晶の破片のように澄浄な冷たくて美味しい水を流している川にやって来ると、羚羊の皮と数珠を樹の枝に懸けて、彼は清らかな冷たい水の中で沐浴し、爽快感を得るために水の深みまで進みました。〔一四・二七〕

一匹の鹿の子は、緑の草をかみ、清澄な水を飲んでから、坐って、沐浴している彼を待っていました。〔一四・二八〕

◇　その時ブラフマダッタ王は、『音だけを〔聴いて〕射貫く』〔弓の技をなす〕者として、狩猟の娯楽を楽しみながら、速く進む馬に導かれるままに〔独りだけで〕その川の岸辺にやって来ていました。彼は菩薩が〔水の深みに〕入った時に生じた水音を聞くと、岸辺の樹々の蔓によって視界が遮られていたため、「猪か鹿がこの川の中に降りたに違いない」と考え、音がした方向に矢を射ました。

その時、大きな矢じりがあるその矢は、かの偉大な心の方（菩薩）の胸を貫きました。彼が倒れる音に、心の内部をかき乱された子鹿は、岸辺から身を起こしました。〔一四・二九〕

「私を射たのは誰」という、憐愍を本性とする方（菩薩）の発したその言葉を聞いて、かの王は「これは誰か」と〔驚き〕、すぐさま馬から降りて、胸に矢が突き刺さっているシュヤーマをよく見ました。〔一四・三〇〕

ようやくかの王は「これはシュヤーマだ」と彼を識別すると、目に涙を浮かべて、「木立の帳に隠れて見えなかったため、あなたをここで、これは鹿だと思って、私は射てしまった」と話しました。〔一四・三一〕

じつに、軽率な者たちが不注意という欠点によって、このような善良な者たちに災難をもたらす、この狩猟と

いう悪習よりも悪い悪習は、人間において、ほかにありません。〔一四・三二〕

「『王』という言葉の誇りと自惚れで分別を失っており、不注意であったため〔今や〕破滅に至ろうとしている、この私を憐れんで、ああ『寂静』の肉体化そのものであられる方よ、『呪詛』という鋭い矢によって、私を絶命させないでください。」〔一四・三三〕

◇　その時菩薩は、心は後悔に満たされてそのように自分の過失をひたすら責めながら〔苦行婆羅門が発しうる〕呪詛の到来を恐怖しているその王に、声をかけました。「いいえ大王よ、私からの呪詛を恐れることはありません。たとえあなたが激しい怒りに駆られて私に矢を射たのであっても、それでもあなたに対する私の心が変わることはありません。まして〔あなたにそのような〕咎がなければ、いうまでもありません。〔一四・三四〕

矢のかたちをした、前世になした行為（業）によって私は胸を射られたのです。それについてあなたにいかなる負うべき罪があるでしょうか。王よ、呪詛への恐れをお捨て下さい。〔一四・三五〕

生まれたもので、滅びないものはあるでしょうか。死に対して私は少しの恐れもありません。しかし私の盲目の両親のことを考えると、私は苦しくなります。〔一四・三六〕

今日私が死んで、別の生に去った時、父母は混乱し惑乱して、苦悩することでしょう。この密林で目が見えない二人は何をなしうるでしょう。〔一四・三七〕

王よ、どうか私の命がこの身体を離れる前に、急いで私の〔老いて〕虚弱な父母を苦行林から〔ここへと〕連れて来てください。〔一四・三八〕

(a)老いが進んだため少し指の震えがあり、(b)萎れた睡蓮のようにとても白い、あの両親の掌をもって、憐れみながら撫でてもらえたなら、幸せ者として私は今日、安らかに命を離れることができます。〔一四・三九〕

◇　どうか次のように、私の言葉を両親にお伝えください。

「あなた方二人から、成長のために『愛情』という水を、この『息子』という小さな木は〔沢山〕注いでいただけました。その彼からの最後の、この『お礼の挨拶』という花をどうかお受けとりください。」〔一四・四〇〕

◇　その時かの王は、「どうして私がこのような悲しいその〔伝言〕を彼ら二人に伝えられるだろうか」と思案して、菩薩に言いました。

「あなたをこの矢で射てしまった私は、〔きっと死後〕悪い世界（悪趣）に赴くことになる。〔さらに〕『悲しい言付け』という矢で、彼らも射ることがどうしてできようか。」〔一四・四一〕

◇　菩薩はいいました。「大王よ、もうこれ以上〔ここで〕時を費やすのはおやめください。毒による麻痺が〔体じゅうに〕回ったかのように、私の身体は疲れ果てています。」

その時、かの王は「これはもう一刻の猶予も無いことだ」と考え、「そうしよう」と返事して、その場で彼の馬を一本の蔓に繋ぐと、まるで素直な弟子が〔師から〕躾の指導を受けたかのように〔すぐに〕苦行林に向かって出発しました。

乾燥した木の葉を踏んで生じた王の足音を遠くから聞いて、かの地（苦行林）に居る彼ら〔両親〕は、「きっとあのシュヤーマが水を取って帰ってきたのだよ」と、話し合いました。〔一四・四二〕

◇　その王は近づくと、その悲しい〔言付け〕を告げることに耐えられず、苦悩する心で、木の葉の小屋の中庭まで来ると、黙って立っていました。すると菩薩の母は「あのシュヤーマが着いた」と思って、語りかけました。

「息子や、水のために甕を持って、川に行ったけれど、今日はずいぶんかかって戻って来たね。火にお供えをしてから、果実と蓮根を取って、葉っぱのお皿に置いておくれ。お前のお父さんはお腹が空いているよ。」〔一四・四三〕

◇　その時ブラフマダッタ王は、〔訪ねてきたのが〕自分であることを告げる、挨拶の言葉を語ってから、その二人

に、意図せずに自分がしてしまったその悪行を話しました。二人は菩薩の災難を聞くと、「ああ、なんと」といって、気を失いました。しばらくして意識を取り戻した〔二人〕は、さまざまに嘆き呻いて、〔王に〕語りました。

「彼の捨ておかれた身体が、鳥やジャッカルによって食い散らかされないうちに、王よ、あなたは苦しむ哀れな私たち二人をすぐに彼のもとに連れていってください。」〔一四・四四〕

◇　そこで王は彼ら二人をかかえて、矢に射られた(20)傷のために起こった気絶により瞑目したままの菩薩のもとにやって来ました。すると母は「息子よ、ああ、息子よ」と叫び、苦悩のゆえに菩薩を抱きしめながら失神してしまいました。またかの宮廷祭僧（菩薩の父）は痛ましげに〔次の様に〕嘆きの言葉を語り始めました。

「祭壇に土を塗ってから、花による供養もなされた後、今日、真言を捧げている最中に、火の中に薪が落とされるべきであった（あるいは：落ちてしまった）(21)。〔一四・四五〕

〔わが子よ〕、(a)『老い』という矢に射られたために仕事を離れ、(b)苦行によって〔窶れて〕色艶を失い、弱った四肢をもち、(c)長くこの苦行林に暮らしてきた、私たちのために、お前が目になってくれた。〔一四・四六〕

ああ死神よ、おんみは同情を捨てて、この『息子』という、〔盲目の〕黒闇を離れて欠点のない、この大きな目を奪ってしまったので、今や〔おんみは〕われらを二度も盲目たる状態にした。〔一四・四七〕

ああ、人々の心を『愛情』という水で心地よいものにし、『偉大な徳性』という睡蓮で飾られている、われらの『この息子』という〔美しい〕池を、死神よ、おんみはなぜ、破壊してしまったのか。〔一四・四八〕

私たちがこれほど甚だ苦しみに悩まされているのに、ああ息子よ、今なぜ黙ったままなのか。憐れみ深いと言われる、善良な者であるお前が、こうしてずっと続くこの〔沈黙という〕無慈悲さを示すとは。」〔一四・四九〕

◇　その後、しばらく経って意識を取り戻した母は、次の様に嘆きの言葉を発しました。

「(a)少したどたどしく話し、(b)幼さゆえに〔乗馬のまねをして〕木棒の馬にまたがり、(c)上げた髪の房（髻）

の先が少し〔風に〕揺れていて、(d)愛らしく目の隅々まで〔黒目を〕くるくる動かし、(e)心配する私に〔出てゆくのを〕抑えられている、家じゅうを自分で〔よちよち〕歩き回っている〔お前〕、――そのお前を、〔今こうして〕両腕で抱きしめているのに、息子よ、どうして強引に私から〔離れて〕行こうとするの。〔一四・五〇〕きちんと毎日供養してまいりました三つの〔聖なる〕火よ、あなた方は今、この私の息子の命をどうかお護りください。またこの森と山に棲む精霊たちよ、あなた方もどうか私の息子に命をお与え下さい。」〔一四・五一〕かの〔母〕がこのように哀れに語りかけながら、苦しみの火に包まれているのを見て、たちまち川の流れですら、其処で、岩から落ちる水によって同情の声を発して、悲しみ嘆くかのようでした。〔一四・五二〕

〔老いた〕夫婦の『悲しみ』の火は、発した途端にたちまち『愛しさ』という供物（燃料）によって〔高く〕燃え上がり、あたりに飛びひろがり、それは『愛』の火の粉として、落ちつきを失った王の心を〔苦しく〕焼きました。〔一四・五三〕

◇　そしてかの偉大な心の方（菩薩）がそのような状態に陥った時、―

〔地震に〕かき乱された海を伴って、大地が遍く震えたため、メール山（須弥山）も震動し、そのため〔メール山頂の〕如意樹（あらゆる願いを叶える神樹）も大きく揺さぶられました。日輪にすこし濁りが生じ、あらゆる方角の空の空間が光輝を失いました。〔一四・五四〕

◇　その時、黄金のメール山の震動によって菩薩の苦しみを知った、頭冠の宝珠から放たれる輝きによって全身が極めて美しく飾られた〔神々の王〕（インドラ）は、(a)風によって震える如意樹から生じた衣によって〔拭き〕清められた、(b)青いウトパラ睡蓮の花弁のようにとても青い、穹窿をなす虚空から〔地上に〕降り立ち、近づくと、彼ら全員を慰め安心させてから、菩薩の〔体の〕上に神的な呪文によって浄めた水を注ぎかけ、

(a)蠢いている〔真紅の〕インドラゴーパカ虫（雨ダニ）〔に覆われた〕様態の大きな岩石を思わせる、(b)湧き出

ている血の滴りによって染まった、かの浄らかな精神をもつ者（菩薩）の胸から、神々の王は矢を抜き取りました。〔一四・五五〕

敬愛の情をいだくインドラ神がシュヤーマから矢を抜き出した時、彼はウトパラ睡蓮のように暗い青色（シュヤーマ）の両目を開きました。〔一四・五六〕

◇〔それを見て〕歓喜のあまり総毛立ち、体じゅうが〔興奮に〕まるでカダンバ樹（クビナガタマバナノキ）の花のようになったかの王は、「もう苦しむことはありません。シュヤーマの両目が開きました」とその両親に告げました。すると彼ら二人は〔それを〕聞いてとても悦びました。

その後インドラはすぐさま自分の〔天の〕都へと去って行きました。王も自分の宮殿に馬で帰って行きました。菩薩（シュヤーマ）は鹿たちが棲んでいるその自分の住まいに戻って来ると、再びまたその尊ぶべき両親に敬いをもって仕えたのでした。〔一四・五七〕

◇ ―さあ、このようにかの世尊（釈尊）は〔父母というものを〕『甚だ益を生む田』（福田）と思い、倦み疲れることのない心で父母に仕えたのです。それ故、良家の息子たち、良家の娘たちは篤い敬信を心がけ、〔それが将来〕自分のためになることをよく見て、常に父母を作法どおりに尊んで仕えるべきです。

『シュヤーマ・ジャータカ』、〔第二部類の〕第四話〔終わる〕。

## 第一九話　象ジャータカ〔22〕

忍辱（被害を耐え忍ぶこと）のもたらす果を知る者は、もし敵が〔自分に〕危害を加えつつあっても、〔相手の〕激情等が鎮まることを願いながら、心を堅固に保って、忍辱を行うのです。〔一九・一〕

◇　次の様に伝え聞いています。―　(a)様々な樹々の花の香りによって〔山林の〕諸方の空間が芳しく薫じられており、(b)レーヴァー（ナルマダー川の別名）の河水に洗われている、大きな内衣を思わせる〔白い〕岩板があり、(c)風に動く竹林の葉のサラサラという音に怯えて耳を立てて〔不安げに〕あちこち動く鹿の群がおり、(d)或る場所では〔森林火災の〕火に恐れを生じて飛び立った鳥の群がおり、(e)また或る場所では高い山の頂きにかかる白い雲の影によって〔にわかに〕暗くなった山の尾根がある、(f)また或る場所では象たちの群に砕かれつつあるシャッラキー樹（香木、樹脂として乳香を分泌する）の香り〔が立ち籠めて〕芳しくなった茂みがあり、(g)また或る場所ではプリンダ部族の女たちに〔拾い〕集められている〔地面に〕まばらに落ちている孔雀の尾羽があり、(h)月の光線の〔液体化したかの〕ような清らかな水が迸る河流があり、(i)また別の場所では苦行者らの娘たちが今採りつつある蔓草の花たちの上を蜜蜂たちが飛びまわって歌うような羽音を立てている、(j)鸚鵡のような緑色をした草地に〔覆われた〕地表が美しい、ヴィンディヤ山に、

(a)秋の雲のような様子をした〔真っ白な〕大きな胴体、(b)シェーシャ龍〔の身体〕に似た鼻、(c)カマラ睡蓮のような赤銅色をした鼻の先端、(d)新鮮なムスター草（ハマスゲ、カヤツリグサの一種）を潰した時のような芳香をもつマダ液を幾筋も滴らせる黒っぽいこめかみ、(e)爪の形が整った足をもち、(f)黄金で出来た甕に形が似た頭部の隆起があり、(g)〔絶えず〕『忍辱』という突き棒（象の制御棒）によって〔自らを〕誤った道に歩み出さないように制御している、(h)あらゆる徳性の居場所であるかのような、象群の長である六牙の香象が、菩薩（釈尊の前生）〔の姿〕として、おりました。

象群のその長は〔全身が〕月光のように白く、真珠のような輝く白い牙と、巨大な丸い頭の隆起をそなえて、〔美しく〕輝きましたが、〔それはあたかも〕舞踏する時のシヴァ神の大いなる〔白い〕笑いが凝集して塊となったものとして夜の闇を追い払う〔月の姿〕であるかのようでした。〔一九・二〕

樹々は風に打たれて、花糸の花粉により黄褐色の蘂のある花々を〔彼の上に〕振り撒きながら、蜜蜂の羽音をもって〔声を発して〕、雪山のように白いその象王を、尊崇の心をもって讃えるかのようでした。〔一九・三〕

蜜蜂たちは、微笑むかのように花びらを開いている樹々の花たちも睡蓮たちも、遠く見捨てて、マダ（雄象が側頭部からマスト期に流す分泌液）に濡れている〔象王の〕両こめかみに、悦んで次々にそっととまっていました。〔一九・四〕

〔滴りが〕途絶えることなく丸いこめかみを飾り、あたり一面の空間を芳しくしているマダを、次々にそっと飲んでいる蜜蜂たちを、その象王が耳朶で追い払うことはありませんでした。〔一九・五〕

乞う者たちが施主から途切れなく願いどおりの沢山の布施をもらうかのように、蜜蜂たちはその〔象王〕から、〔流れの〕途切れることのない、うっとりさせる多量の〔マダ〕をもらいました。〔一九・六〕

◇その象群の主が住んでいることによって、ヴィンディヤ山は自分のほうが黄金のスメール山よりも勝れていると思っているかのようでした。一つの王国が良い王を得て正しく護られた時に日々繁栄するように、その象群は彼に正しく護られながら日々盛んになりました。

本性から善良なる心をもち、忍辱を好むかの〔象王〕には、愛する妻として、バドラーとスバドラーという名の二匹の雌象がおりました。〔一九・七〕

◇　さてある時、(a)風に〔左右に〕吹き動かされる旗のようにジグザグに屈曲して〔空を走る〕蔓草のつるに似た稲妻が閃いた時に〔思わず〕大きな目を閉じた〔女〕、―(b)水の重荷をかかえた雨雲が轟くたびに恐怖に足を震わせている、(c)蔓草のような細い腕を振り上げているため豊満な胸が高く突き出た、(d)剣の輝きが右腕を明るく照らし〔悠然と一輪の〕如意樹の花を嗅いでいる愛する男に〔懸命に〕しがみついている、(e)肩まで垂らした髪の房が緩んだために耳に挿した青蓮華の花が落ちてしまっている、(f)上着が風にはためいてしまうのを押さえつけている、

(g)ほっそりした全身が〔稲妻に〕燦めく装身アクセサリーの宝石によって光り輝いている、(h)空を飛翔しつつある、一人のヴィドゥヤーダラ族（高山に棲み飛行能力をもつ半神的な種族）の女の、(a)その華奢な若枝のような手から〔地上に〕落としてしまった、(b)新鮮な、(c)強い芳香があたりの空間を芳しくしており、(d)〔花の中で〕蜜蜂の群が歌う羽音を立てている、(e)花糸がまるで黄金の針のようである、(f)直径が一つの車輪ほどもある、(g)雄黄のように黄色い花の蜜をもつ、(h)マーナサ湖（チベットの聖湖マーナサローワル）に生えていたものであった、一輪の睡蓮が、山林の中で独り過ごしていたその象王の目の前に落下してきました。

その蓮を拾って、彼は次のように考えました。「バドラーか、スバドラーか、私のふたりの妻の最初にやって来たほうに〔これを〕贈物として与えよう。

(a)飛び動き回る蜜蜂の群に内部が満ちている、(b)芳香を発する花糸が鏤められた蘂をもつ、(c)笑いかけるかのように花開いている愛らしい花弁に満ち溢れた、この大きな睡蓮を私は喜悦の心をもって贈ることにしよう。」〔一九・八〕

◇　その時、最初にやって来たスバドラーに、その黄金で出来ている睡蓮をかの象王は与えました。彼女はその香りを嗅いでから、恭しく〔自分の〕頭に付けました。その後〔別の妻〕バドラーがやって来ましたが、スバドラーの〔額の〕両方の隆起の間に置かれている睡蓮を見ると、「あの睡蓮は、夫がきっと私をないがしろにして、あの異妻に与えたものに違いない」と考え、すさまじい嫉妬心を懐いて、その象王から離れ去って、別の所で過ごしました。

かの象王が別の妻に与えた、芳しく花開いた睡蓮を目撃したその日一日、彼女はずっと嫉妬に満ちて、憔悴した姿で草も食べず、渇しても水も飲みませんでした。〔一九・九〕

正しい意識を保ついかなる者が、『不正な思い込み』という供物〔を火を投入すること〕によって燃え上がるも

のである、『嫉妬』の焔を、おのれ自身を焼くために増大させるでしょうか。〔一九・一〇〕

賢者たる者たちは、心楽しく横になって〔安らいでいて〕、誤った道に進むことはありません。彼らの『心』という家に、『嫉妬』という雌蛇が棲みつくことはありません。〔一九・一一〕

◇　その時バドラーは樹々の影に覆われたヴィンディヤ山の岩の上で、興奮したチャコーラ鳥の目のように赤い衣で身を包んだ一人の独覚（辟支仏、縁覚）が、まるで絵に描いたかのような〔姿〕で、眼を動かさずに結跏趺坐を組んで禅定をしているのを見かけると、池からクムダ睡蓮を取ってきて、〔その聖者に〕捧げて敬意を示しました。

その雌象が〔聖者の頭上に〕空高く撒き散らしたそれら白い睡蓮の花々によって、その聖者はきらきらと光り輝いているように見えました。まるで夕べの薄明の時に、輝く星々を上方に伴って、雨雲がその全身を稲妻で照らしながら光り輝くように。〔一九・一二〕

◇　そしてその雌象はヴィンディヤ山の斜面を登ってから、「独覚を敬って供養した事の善根（功徳）がもたらす果報によって、あの香象（象王）を殺すため、人間の王妃になれますように」と念じながら、〔崖下に〕身を投げて自らを死へ解き放ちました。

その彼女の肉体の重量によって砕かれた樹々の枝が〔地面に〕落ちる轟音を聞いて、孔雀たちは尾羽の月輪を強く振り動かして、飛び上がりました。一匹の虎は眠っていましたが、片方の目を見開きました。鹿の群は驚いて口に咥えた草を落とすと、遠くに向かって耳を立て、混乱して動きまわりました。〔一九・一三〕

◇　彼女は命終の後、或る王の娘として、前世の記憶をもったまま生まれました。〔やがて成長して〕(a)胸のつぼみが少し膨らんできて、(b)〔女の臍の上にある〕三条の横の皺という〔体の〕階段を登ってゆく事にうんざりし始めている『思春期』という〔人体の〕工芸職人によって〔女として〕愛らしくなるように肉体の美が徐々に付け加

えられて、(c)羞恥と微笑みが〔女としての〕嬌態をなし始め、(d)蜜蜂の群のように黒い髪の房、(e)金箔のような白浄の〔肌の〕輝きをもつ、(f)まるで〔地上に〕具現化した女神シュリーのごとき〔神々しい美に輝く〕女になった彼女を、父は或る王に嫁がせました。

彼女は他のあらゆる女性を凌駕する美しい女としての勝れた性質によって、その王を官能の虜にしましたが、ある時その彼女は、胸や四肢に〔冷たい〕梅檀を塗り、丸く窄めた唇で〔苦しげに〕呼吸しながら、自分が高熱があるかのように見せかけました。医者たちに診察されながらも、そうやって熱病をよそおっていましたので、彼女の夫は非常に憂いました。彼女は夫に言いました。

「黄梅檀〔を塗ること〕も、あるいは雨雲からの冷たい風も、あるいは水晶のように澄み切った月の光線も、私のこの熱病を鎮めることはできません。〔一九・一四〕

ヴィンディヤ山に、白い雲に似た姿の、重い六牙をもつ象王がいます。王よ、その〔象王の〕蓮根のように白く輝く大きな牙の中には、多くの真珠があります[23]。〔一九・一五〕

水滴のように澄んだ、それら〔の真珠〕をすりつぶして、私の体に塗れば、また彼の牙から私のために寝台が作られるならば、この燃えるような熱病は鎮まります。」〔一九・一六〕

◇　その時その王は、「疑いなくこの王妃は前世の記憶をもっていて、別の生でヴィンディヤ山に棲むその香象を見たか聞いたかしたに違いない」と確信し、一人の猟師を呼び出すと、命じました。「ヴィンディヤ山に六牙の象がいる。もしその〔象の〕牙を持って来るなら、君に大きな財を与えよう。」―　猟師は答えました。「私がなしうるすべてのことをいたします。」―　妃は言いました。「私はその象王を信頼させて〔近づく〕ためのよい手段を知っています。

袈裟の衣を着ている、〔心が〕寂静である出家者を見れば、その象は利口な善い弟子のように頭を下げて、敬意

を示します。〔一九・一七〕

そうしたら、上下の袈裟衣をきちんと着たままで、あなたは毒を塗った矢でその〔象王の〕急所を射当てるのです。」〔一九・一八〕

◇「そのようにいたします」と彼は同意し、袈裟衣を身に纏い、弓矢を持つと、ヴィンディヤ山に赴きました。山の森林の中をうろついている彼を見て、その象の群は恐れて、象王に報告しました。

「袈裟を着ている或る男がいますが、火花を発する黄色い目をして、体は鉄の柱のようであり、生き物たちを〔何か〕ぞっとさせる者であるかのように見受けられます。」〔一九・一九〕

◇菩薩（象王）は言いました。「袈裟衣の人は恐れなくてよい。あなた方はこう考えなさい。

〔袈裟衣とは〕慚愧〔の表現〕です。聖者たちにとって、一つの旗印として、寂静への道を指し示すものです。慢心を打ち砕く原因となるものです。もし体を飾っている衣が袈裟色に染まっていれば、〔それは〕人々にとって、信頼のあかしなのです。」〔一九・二〇〕

◇その〔象の〕群からさほど遠くない所に居るかの猟師は、樹に身を隠し、弓を引き絞りました。

その〔猟師〕が象王を殺そうとして竹で作った弓弦に鋭い矢じりをつけた矢をつがえて〔狙って〕いるのを、ヴィンディヤ山は、〔山の〕息吹のような風に揺り動かされた樹々の夥しい『枝』という〔広げた〕手や『若枝』という指をもって〔懸命に〕遮ろうとするかのようでした。〔一九・二一〕

象王は〔流れ出る〕マダのゆえに目を閉じ、鼻を耳のところに置いて、マダに濡れた頬を一本の樹に擦りつけていましたが、〔その時〕猟師は善の道を知悉する者である彼を、ごく近くから矢をもって、額の中央にある窪み（鼻腔）へと、射当てました。〔一九・二二〕

猟師は、憤怒した象群に追いかけられ〔逃げ回る〕うちに、弓も上衣も落としました。恐怖に苦しむ彼を、象

王は息子のように慰めて安心させながら、かくまってあげました。〔一九・二三〕

「ああ、なんという距たりであろうか、〔欺して〕危害を加えたこの猟師と、象王がこのように〔示される〕憐愍とは！」――山の密林の奥に棲む精霊たちは心の中でそう、驚いたに違いありません。〔一九・二四〕

鋭い矢に象王〔の額の急所〕が打ち割られ、その場で彼が、流れた血の滴りに〔赤く〕縁取られた口を少し震わせている間、象たちの群は深く悲しみ憂えて、途中まで噛んでいた芳香あるシャッラキー樹の若枝を〔口から〕落としました。〔一九・二五〕

雌象スバドラーは、夫である象王の『忍辱』が〔その時〕発出しかかった『怒り』を〔自分の心から〕引き抜いたのと同じ様に、鼻先を少し曲げながら鼻でその矢をつかむと、力をこめて引き抜きました。〔一九・二六〕

憂える彼女は、首飾りの紐が切れてばらけた真珠の粒々のように〔燦めいて〕みえる〔彼女の〕鼻先から注ぎ浴びせる水で、その象王の血のしずくに染まった矢の傷口を濡らしてあげました。〔一九・二七〕

ナルマダー川は〔その時〕あたかも「〔もし象王が死んだら〕喉が渇いて河水の中に入ってくる誰が私をマダで芳しい香りにしてくれるだろうか」と、大きく裂けた渦巻きの中から波の音を激しく立てながら、悲しみのあまり大きな声をあげているかのようでした。〔一九・二八〕

〔不安げに〕身を震わす蜜蜂たちの群は、〔象王の〕頬のまわりをゆっくり飛び回りながら、「象王よ、いま矢に傷つけられて生じたあなたの苦痛は、やわらぎましたか」と尋ねるかのようでした。〔一九・二九〕

〔天の〕インドラ神は、(a)拡がる沈水香の煙のような暗い灰色の、(b)絶え間なく動く稲妻たちの環によって縁取られた内部をもつ、厚い雲によって、かの〔象王〕を楽にするために、額を照りつけて苦しめる、熱光をもつ〔太陽〕を覆いました。〔一九・三〇〕

澄んだレーヴァー川に出会ったことで冷涼になり、様々な満開の花々によって馥郁たる香りをつけられた風が、

親しい友人のようにやって来て、矢によって深く傷を負った象王を扇ぎました。〔一九・三一〕

◇　その時象王は、「私がどのようにか、もし死ぬことになるならば、この象の群は庇護する者を失ってしまうだろう」と考え、次の様に『真実の誓言』をしました。

「危害を加えたこの猟師に対しても私には愛情がある ―― このことの真実によって、いま私の〔体内の〕毒は消えよ！」〔一九・三二〕

◇　するとたちまち、矢のせいで意識が遠のいてゆくほどであった痛みが、『真実の誓言』の威力によってその象王から消え失せました。そのように彼が健康を取り戻したのを見ると、かの猟師は深く頭を下げ、王妃に関わるその出来事を話してから、〔次の様に〕言いました。

「象たちの守護者よ、決して冷酷な心を持つことのないお方よ。〔親切を受けるに〕価しない器の者である、冷酷な私によって、象牙を目的として、あなた様は矢で射られたにもかかわらず、〔私への〕憎悪に打ち勝たれました。」〔一九・三三〕

その猟師の言葉を聞くと、象王は鼻で〔自分の〕牙をつかみ、心悩むことなく、〔全部の牙を〕引き抜きました。〔一九・三四〕

彼の、血の流れが絡みついたその鼻は、まるで〔真紅の〕バンドゥーカ（ゴジカ草）の花環で縁飾りをほどこした白い蓮の花環のように美しく見えました。〔一九・三五〕

〔その時〕同じ『真実の誓言』によって、その〔牙を失った〕象たちの守護者（菩薩）に、螺貝から切り取られた薄（真珠層）のように純白である〔六〕牙が再びすぐに生じたのです。〔一九・三六〕

そして白い雲のような輝きをもつ牙が象王に再び生じたことを〔見て〕驚愕しているその猟師は、〔その彼から引き抜かれた〕牙を頂戴して、森の中から王の宮殿へ赴きました。〔一九・三七〕

◇　その時、かの王は象牙を見ると大喜びで、その猟師に約束したとおりの財を与えました。しかしその妃はもう熱病のふりをするのをやめて、それらの牙を見るや否や生じた後悔に苛まれて、夫である王に、前世で経験したその嫉妬の出来事を告白し、そして蓮のような眼を涙でいっぱいにして、何度も何度も嘆きました。

「ああ、嫉妬心とは何と厭わしいものか、〔それは自分の〕善い面を破壊してしまう。それに駆られて、わたしは血迷って愚かな思いを懐いて、森に棲んで苦行者の如く鎮められた心をお持ちになっていたあの象群の守護主を、死王（ヤマ）の国に追い遣ってしまったのだ。〔一九・三八〕

長い間あの偉大な心の方（象王）に護られていて、他の象たちに迫害されることがなかったあの象たちの一群は、今やあの象王を失って、途方に暮れて混乱するなかで、どうなってしまうのだろう。〔一九・三九〕

絶えずマダを飲みたいと願って、〔象王の〕両こめかみのあたりを繰り返し飛び回っていた蜜蜂たちは、今や彼がいなくなって途惑い混乱し、〔やがてその姿を探し続けるのをやめて〕蓮池の繁みへ行くようになるまでに〔どんなに〕久しくかかることだろう。〔一九・四〇〕

(a)あの象王が〔かつて〕繰り返しこめかみを擦りつけていたために木の皮が〔剥がれて〕白く光っている、(b)彼のマダのわずかな残滓によって馥郁たる香りがする、その樹のもとを、スバドラーはいつまでも離れようとしないでいることだろう。〔一九・四一〕

ああ大地よ、海浜〔の白い海岸線〕を腰帯として身を飾り、〔地表に〕伸び開く柔らかな若草を衣裳として身に纏っている〔女神〕よ、おんみは、あらゆる夫の最高の者を殺した女である私を、どうして〔ここに〕とどめ置くのか。どうして私に〔地面が〕引き裂けること（地獄への落下）を与えないのか。」〔一九・四二〕

◇　そのように身も世もなく泣き悲しむその王妃を、その時かの猟師が慰めました。「お后様、悲しまないでください。かの偉大な心の方（象王）は、『真実の誓言』の大きな力によって、再度生えた美しい巨大な牙をすでにおもち

になっているのです。矢の毒の効力は消え、生き物たちを益するために命を保持されて、〔元のように〕あの大きな象群を治めておられます。」

その時彼からその言葉を聞けたので、〔やっと〕妃は心の朗らかさを取り戻しました。また王は、象王の〔狩人に対して持った〕憐愍の心を幾度も考えては、驚嘆したのでした。〔一九・四三〕

◇ ― さあ、このように、『憐愍』の本性に従う偉大な心をもつ者たちは、『忍辱』がもたらす成果を願いながら、たとえ敵に武器で攻撃された時でも、〔反撃する〕能力はあっても、〔常に赦して〕堪えていらっしゃるのです。そのことを考えて、〔あなた方は〕堪忍するという行為を大切にすべきです。

『象ジャータカ』、〔第二部類の〕第九話〔終わる〕。

## 第二〇話　チャンドラ王子ジャータカ(24)

毒蛇も牙を抜かれていれば、怒っていても〔戦う〕力がないため、忍辱（堪忍）をなすでしょうが、力を有していてもなお忍辱を捨てない者こそが、〔真の〕忍辱をなす者と知るべきです。〔二〇・一〕

◇ 次の様に伝え聞いています。― (a)剛勇と政略と威光によって他の諸王や諸侯に打ち勝ち、(b)多くの象と馬と庫蔵の財をそなえ持ち、(c)〔身から発する〕威厳のオーラがあり、(d)堅固な〔不撓の〕心をもち、(e)他者の意見に好んで耳を傾けるなどの知の徳性に立脚しており、(f)人生の三目的に随う本性を持ち、(g)生まれつき率直で〔詐らず〕、(h)南路（デカン高原を通る南の大街道）を支配する者である、カリンガラージャという名の王がおりました(25)。

その強くて敵に勝利する王がもつ軍隊は、まるで盛り上がって高さが増大した海の水が浜辺の果てに押し寄せるように、腕（武力）と勇敢さに敗れた他の国へと押し寄せました。〔二〇・二〕(26)

音を轟かせて次々に続くドラム（戦鼓）の音に怒りをたぎらせた、その王に属する象たちは、一斉進撃の時に、辛うじて、鉤棒をもった御者たち〔の攻撃命令〕に従順になりました。〔二〇・三〕

◇ (a)このように力を増大させ、(b)敵たちが砕くことができない〔王者の〕矜持をもつ、その王には、カンダダーラという名の婆羅門の大臣がいました。かの王は家系が絶えてしまうことを恐れて、格別な多くの神霊たちに息子〔の誕生〕を求めて祈願しましたが、後にカンダダーラはその王に言いました。「王様は後宮に〔ずっと〕お入りになってください。私が王様のご子息〔誕生〕のために神霊に祈願しながら、国を〔預かって〕お守りしましょう。」「そうすることにしよう」と王は答え、後宮に入ると、感官の享楽に耽溺しました。カンダダーラはあらゆる〔王室の資産たる〕什器類に自分の名前の印をつけて、王国を意のままにしました。カリンガラージャ王は様々な舞踏や歌唱を見たり聴いたりすることに心を奪われ、まるで神々の王が天女（アプサラス）たちの群に囲まれるように、後宮の女たちに囲まれて過ごしました。

〔其処で〕鏡に見入っている或る女の両頬は、瑞々しくてマドゥーカ（アカテツ科イリッペ）の樹の花のように白く、月の美しい輝きを発しているかのような、心を奪う美しさでした。かの〔王〕はその両頬の上に、葉の装飾文様〔の化粧〕を描いてあげました。〔二〇・四〕

別の一人の女が、大きな目を動かさず〔凝視しながら〕、新鮮な青睡蓮の花の上にとまっている、おどおど震えている一匹の蜜蜂を、微笑みによって少し唇の先を動かしつつ、もう一輪の青蓮によって〔その下に〕覆い隠してあげたのを彼は見ました。〔二〇・五〕

向こうを向いたまま、座具の上に腰を落ち着けて、心を魅了する絵の画布に見入っている或る一人の女〔の背後〕に、その王は足音を殺して忍び寄ると、〔驚かそうと〕両手で彼女の目を覆いました。〔二〇・六〕

また、手を強く振りながら「どうか私はご免ください」と、(a)恐れのあまり自分の名を口ごもりながら語る、

(b)両胸を一枚の布で隠し、(c)全身を震わせている〔女〕を、召使い女であるにもかかわらず、彼はつかまえました。〔二〇・七〕

「きれいな女よ、おまえだけが私の最高の生きがいだ。さあ視線を私に向けなさい、魅力的な笑みをもつひとよ」と話しながら、かの〔王〕は、うつむいたままでいる或る別の女をどうにかして喜ばせようとしました。〔二〇・八〕

少し動くたびに音を立てるアンクレットの飾りをつけている一本の足〔のつま先〕で、モザイクが施された床の上に優美に線を描いている、笑っている一人の女のもとで、〔王は〕ほかの女たちの〔鋭い〕視線という矢の標的にされながら、何かしらを耳にささやきました。〔二〇・九〕

◇　その時後宮の女たちは、酔ったふりをしながら、様々な柔らかな笑み・会話・怒り・嫉妬・眉をしかめること〔など〕の、心を奪う美しい嬌態を用いて、そのようにあらゆる官能の快楽を味わっている王の心を、全く夢中にさせました。

(a)笑いふざける時に眉を上げて動かす、(b)微笑みという月光に満ち溢れた月の容をもつ、(c)〔腹にある〕三条の皺（トリヴァリー）の上に湾曲して走る産毛のすじがある、〔そんな魅力のある〕女たちが、一体いかなる男の心を奪わないでしょうか。〔二〇・一〇〕

女たちの〔発する言葉〕、―きらきら輝く歯の並びの光りをもつ言葉、あたりいちめんに月の〔容の〕美を注ぎかける言葉、ラヴァリー樹のような香しさをもつ言葉、情熱によって飾り付けられた言葉、―〔そんな〕言葉たちが、どんな男を夢中にさせないでしょうか。〔二〇・一一〕

月のごとき〔輝かしい〕容、耳まで届いた〔ぱっちりした〕目、オニカッコウの頸部のような光沢をもつ黒髪、ターラ樹（棕櫚）の熟した果実のような胸、―女たちがもつ〔それらの魅力の〕何が〔男の〕心を奪わないで

しょうか(87)。〔二〇・一二〕

多くの『悪徳』という蛇に満ちた、『美しい女』という毒性の蔓の林に赴くことがなければ、男たちは安楽で、賢明であり続け、三界において軽蔑される〔悪しき〕生存状態に陥ることがありません。〔二〇・一三〕

◇ さてしばらくの時が流れ、王妃が妊娠しました。

徳性の宝蔵である方（菩薩）を胎に持したかの〔妃〕の腹は日に日に大きくなりました。両の乳房は乳に満ち、乳首が黒くなりました。〔二〇・一四〕

〔来訪した〕夫を見ると、彼女は両膝の上に、若枝のように華奢な両手をつきながら、やっとなんとか座から立ち上がりました。〔二〇・一五〕

息子を望む王は、「産むのは今日だろうか、それとも明日だろうか」と強い関心をもって、彼女を愛情深く幾度も眺めました。〔二〇・一六〕

◇ やがて浄らかな〔吉〕日に彼女は、(a)まるで眼前に〔現れ出た〕宝藏のように自ら発する光輝によって王の宮殿の内部を照耀する、(b)神の子のような容姿をした、(c)世界すべてを〔彼の輝きで〕宝飾の如く美しく飾る存在たる、一人の息子を産みました。

その〔子〕は身体の光輝が月の光輝を凌駕していたので、親族たちは彼の名をチャンドラ（月）としました。〔二〇・一七〕

◇ 三十人の他の妃たちにも息子たちが生まれました。

さて八歳になった頃、〔王は〕チャンドラ王子と他の王子たちを、王族の学問に精通する或る一人の師に〔教育を〕委ねました。狩猟などの悪行に没頭している他のすべての王子たちを、チャンドラ王子は技芸のうまさや、〔身から発する〕威厳のオーラや、腕力において、遥かに凌駕していました。

〔或る氏族の人々が〕もし『徳性』と血縁の間柄であり、〔先天的に〕良識ある者として生まれついているなら、〔彼らの〕権門貴顕の地位は称賛されるべきです。しかし偉大な〔家柄の〕或る者たちが生まれて以来ずっと持ち続ける、無思慮な行為と悪徳は有名です。偉大な家系から、犬に等しい人々も生まれることが観察されます。輝く宝藏をもつ海からは〔単なる〕貝殻も生まれるのです。〔二〇・一八〕

孔雀の尾の月輪にある青色も、サファイアにある青色も、確かにどちらも似ています。しかしその〔青色〕は、宝石にあるもののほうが尊ばれます。なぜなら良いものとは、〔その性質が〕本物であることに基づいているからです。〔二〇・一九〕

美貌の人であっても、まったく徳性がないことがあります。ガラスはサファイアと似た外見をもっていても、その性質はもっていません。〔二〇・二〇〕

◇　さてかの王は菩薩（チャンドラ）を副王（王位継承者）にする灌頂を行い、またそれらの王子たちにも多少の領地を与えました。ある時チャンドラは王から許可を得て、兄弟たちと共に自分たちの領地に行き、カンダダーラの名の印が付けられている〔王家の所有物〕を見て、言いました。「我々の父はまったく名目だけの王であって、カンダダーラこそがここで支配者なのだ。」―　王子たちは提案しました。「このカンダダーラの名を消して、私たちはそれぞれ自分の領地で、自分たちの名前をあらゆる品々に書こうではないか。」―　「そうしよう」とチャンドラが同意したので、彼らは最初にチャンドラの名をあげて、その後に各自の名前を書かせました。そのように生じた出来事を知ると、カンダダーラは甚だ激怒し、婆羅門たちを集めて、秘かに語りました。「あの王子によって私の支配力が奪われようとしている。それ故、今が〔なすべき〕その時であろう。何らかの陰謀（内密の語）によって、チャンドラを亡き者にする必要がある。皆のもの、〔次のように〕心得よ。

軽微なものであろうと、重大なものであろうと、ねらった成果を得ようと心に決めた賢者は、一瞬でも無為に

過ごすべきではない。たとえ粘土があったとしても、陶工がもし棒で円盤を絶えず休まず回転させなければ、皿や壺は生じることがないのだから。」〔二〇・二一〕

◇　婆羅門たちは言いました。「あなた様なら、この件で一つの策を見出すことがお出来になるでしょう。」―　カンダダーラは言いました。「もし〔お前たちが〕そう思うのなら、では〔このようにせよ〕。もしあの王がふとしたことでお前たちのいる前で、夢について話をしたなら、お前たちは忠告するがよい、『王様、カンダダーラは夢の結果（現実の意味）に精通しております。彼にお聞きになったらよいでしょう』と。」―　婆羅門たちは「そういたします」と同意しました。

さてある時、かの王は夢を見て、戦慄した心でかれら婆羅門たちにその夢について話しました。すると婆羅門たちは「カンダダーラは『夢の学』に精通しています」と助言しました。そこで王はカンダダーラを呼んで、次のようにその夢について話しました。

「けさ〔見た〕夢の中で、灰色の惨めな民衆がいるこの都城すべてが、内臓によって包まれていた。悪しき行状〔の者〕によって私は縛られて、〔縄に〕体はきつく締めつけられ、沢山の死体が山積みになっている火葬の薪のある土地に抛り投げられたのだ。〔二〇・二二〕

◇　そこで今、その夢の示す結果について、師の方々は説明してくださらぬか。」―　カンダダーラは答えました。「王様、その夢が〔現実に〕結実するものは本当に恐ろしいものであると判断されます。

この夢は次のことを示唆します。―偉大な王位から失墜するか、あるいは、あなた様が二箇月後に亡くなられます。」〔二〇・二三〕

その婆羅門の言葉を聞いてから、その王は〔姿から〕美の輝きを失ってしまいました。「死ぬのだ」と思いながら〔日々〕戦々恐々として、園林の地でも宮殿でも楽しみませんでした。〔二〇・二四〕

死は遠くにあるものであっても、その性質上、人が〔それに〕思いをめぐらすなら、心を滅入らせるものです。まして、首のずきんを拡げた毒蛇のように〔どこかの物陰に潜む〕はっきり見えない〔死〕が、生者たちのきわめて近くにいる場合はなおさらのことです。〔二〇・二五〕

◇　かの王はカンダダーラに尋ねました。「では私が王位を失うことなく、また非時の死を迎えなくてもよい、何らかの方法がないのか。」―　カンダダーラは答えました。「それでは閣下はその方法をお聞きください。チャンドラを含めたすべての王子たちと、ほかに四つ足の獣たちを、祭式の執行において〔犠牲獣として〕殺して捧げなくてはなりません。

王よ、犠牲祭の地において、鸚鵡の嘴のように濃い赤の彼らの血に満ちた広大な池の中にあなた様が下りて〔浴される〕なら、王位からの失墜もなく、死王の国（冥界）に行かれることもないでしょう。」〔二〇・二六〕

◇　その時かの王は「私がさらに生きてさえいれば、もっと勝れた徳をもつ息子たちも生まれるだろう」と考えて、鉄鎖を足に付けられたそれらの王子たちを〔その地に〕連れて来ると、カンダダーラに言いました。「犠牲の儀式を始めよ。」

そうして、王子たちがひどく悲嘆するなか、ついに犠牲の儀式が始められた時、その悪党の大臣は王の長子がいないことに〔気づき〕当惑して、王に語りました。〔二〇・二七〕

「王よ（人中の月よ）、あなたのご子息、力によって高慢なあのチャンドラが来ないのでしたら、災いを滅するための供犠の儀式は大きな成果をもたらさないでしょう。」〔二〇・二八〕

◇　王は答えました。「チャンドラ王子は長上の者（父母や師）に篤く仕える者であるから、わが命令に背くことはすまい。彼に使者を送ろう。」―　「そうなされませ」とカンダダーラが同意したので、かの王は使者を呼んで、命じました。「チャンドラが居るところに行って、『お前は私のもとにすぐに来なくてはならない、と伝えなさい。』―

「かしこまりました」と答え、王の命令に縛られてその使者は、菩薩のもとにやって来ました。

かの偉大な心の人（菩薩）は、取り巻く人々を伴って、(a)春が咲かせ始めたマンゴーの花房がある、(b)アティムクタカ（蔓性のジャスミン）や無憂樹やティラカ樹の香りが芳しい蔦のあずま屋がある、(c)至るところ皆美しい、(d)まるで『春の美の女神』の娯楽の住処たる、或る一つの園林に入り、閑かな時を過ごしていました。

門番に用事を述べて入場を許された使者は、こぼす涙の滴りで顔じゅうを濡らして、チャンドラにお辞儀をすると、多くの人と生き物を殺すために行われるその供犠の出来事をなんとか〔嗚咽しながら〕やっと語り、かの王の命令を伝えました。すると親友や近親者たちは菩薩に次の様に言いました。「このすべては、あなたを亡き者にするための、邪悪な心をもつカンダダーラの策謀です。あの大悪党は、まるで隠遁した修行者のように身のしぐさは安らかに鎮まって見えますが、内心はまるで羅刹のように穢らしい奴です。ああ、悪人どものやる事は！　―ともあれ絶対に、

寂静者（聖者）のふりをしていても心は荒々しい悪人を、少しでも信頼すべきではありません。岸辺でアオサギが不動のままじっと立っていたとしても、〔水中で〕震え動くシャパリー（銀色の川魚）をどうして殺さないことがありましょうか。〔二〇・二九〕

悪人どもによる堪え難い行いを、〔我慢して〕受けるべきでありません。〔奴らの行為は〕心が堅忍不抜である者をも絶望へと導きます。それは、あたかも咬まれて入る非常に激烈な蛇の毒のように、意識に混乱を生じさせ、〔人の〕内部に熱い苦しみを与えるものです。〔二〇・三〇〕

◇　それ故、王子よ、さあ今こそ命令をお下しください、あの羅刹の振舞いをなす、空疎な「婆羅門」の名をもつ邪悪な者、カンダダーラカを私たちは捕縛して、引っ立ててまいりましょう。それとも死神の領土（あの世）に送ってやりましょうか。」―　菩薩は答えました。「実をいえば私にも、カンダダーラに対して少し生じていた怒りがあ

りましたが、しかし火を水流によって消すように、その〔怒り〕は忍辱によって鎮めることができました。もしわれらの命によって長上の方たちが長寿を得られるなら、われらは本望ではありませんか。それ故、あなた方はカンダダーラに怒りを懐くのはもうおやめなさい。私は行きます。」―　その時その使者は驚き、次の様に言いました。

「ああ、あまりに偉大な、希有なる行為です。まったくもって王子は真実の『忍辱者』です。なぜなら、

その人がもつ『忍辱』という明呪が、仇敵を滅ぼそうと頭をもたげる『怒り』という蛇を止めうるのであれば、

その人は至福に達した者、〔聖なる〕光明を得た者、浄らかな心をいだく『忍辱を有する者』たちの首座に位置する者です。」〔二〇・三二〕

◇　その時菩薩（チャンドラ）は、涙をこぼしているお付きの人々を伴って、車に乗って供犠の〔祭場の〕中にいる父のもとにやって来ると、拝礼して語りました。

「ご自身の長寿を願われる父上がもし私を〔供犠のために〕施捨するのでしたら、この身を犠牲獣として用いて下さい。」〔二〇・三三〕

「息子よ、私はお前を〔供犠のために〕施捨する。」―そう王は語りつつ、〔心の〕苦しみのため、チャンドラの上に涙の滴りを落としました。〔二〇・三三〕

人はたとえ長生きしたところで、〔結局〕死王の領地（冥界）に行かねばならないのですから、他人を殺害することによる〔自らの〕寿命の存続を、誰が望んでよいものでしょうか。〔二〇・三四〕

◇　その時カンダダーラはそれらの〔供犠執行の〕祭官たちに言いました。「導師たち、聞きたまえ。第一の献供が火に投下される時に、最初にまずチャンドラ王子が殺されて捧げられるべきであり、その次はこれらの王子たちである。」

そのように告げるカンダダーラを、華奢な体つきをした王子たちが頭をもたげて見るさまは、まるで鹿たちが

頭を上げて虎を見るかのようでした。〔二〇・三五〕

◇ その時それらの王子たちは菩薩に向かって合掌し、次の様に申し上げました。

「人々から愛され、崇高な心をもつ偉大な方である、あなたが長兄として〔この場に〕おられるというのに、どうして犠牲獣さながらに、私たちはこの無慈悲なカンダダーラカによって死王の国へ引いて行かれてしまうのですか。」〔二〇・三六〕

◇ それらの弟たちの声を聞いて、苦悩する菩薩は、慈心を具えた三昧に入りました。

澄んだ心で、〔死の恐怖に〕打ちのめされた王子たちの上に精神を集中した、彼の三昧の力によって、彼らが驚いたことに、蛇を思わせる彼らの足の鉄鎖は砕け散りました。〔二〇・三七〕

◇ 足の鉄鎖が砕け散ったことにかの王は驚愕し、また「これはどうしたことか」とカンダダーラカがその場で考察をし始めた時、

シヴァ神の頸のように青黒い、重たく水をはらんだ雨雲が、空を覆いつくしながら現れ出ました。それはつりあげた眉に似た形の閃光を発する稲妻を伴い、怒って、羅刹のような咆え声を高く上げました。〔二〇・三八〕

(a) 樹々が破壊されて鳥たちが飛びたち、(b) 轟音を発し、(c) 岩盤が大きく揺り動かされている山々の頂を、風は崩落させながら、猛烈な勢いで吹きました。〔二〇・三九〕

ぶ厚いその雨雲の広がりはおびただしい量の石の雨を間断なく降らしました。婆羅門たちはひどく仰天しあわてふためき、〔唱えていた〕オームの聖音は供犠の途中で止まりました。〔二〇・四〇〕

雨水を重くはらんだ雲たちの横腹を、太陽は光によってオレンジ色に染めながら、まるで王の非行を〔これ以上〕見るに堪えないかのように、速やかに〔地へ〕沈みました。〔二〇・四一〕

供犠祭の地面の上に置かれた黄金の壺たちは、怒っているかのように天から勢いよく落ちてくる石たちによっ

て叩かれながら打ち壊され、上下に踊り回りながら、カンカラと大きな音を立てました。〔二〇・四二〕

空から落ち続ける石〔の雨〕に打たれて、供犠の火はまるで恐怖したかのように、ふるえ燦めく火花をあたりにまき散らしながら鎮まって消え、〔残った〕白い煙の幕も薄く散じて流れ去りました。〔二〇・四三〕

(a)重たい鉄の鞘がつけられ、(b)土手を突き崩したために泥にまみれている、象たちの牙は、石〔の雨〕に打たれている間、高い〔金属〕音を響かせながら、パチパチと燦めく火花を発しました。〔二〇・四四〕

孔雀は止まり木から落ち、雄鶏は恐れて奇声をあげました。飼育されている鹿たちは石に打たれて、目を白黒させながら、家の内側に逃げ込みました。〔二〇・四五〕

雲からの冷涼な風を〔舌で〕飲むことを欲して、半分とぐろを巻いた体を大きな蟻丘の外に出していた蛇は、石に打たれると、首のずきんを拡げ、シューという音を立てながらすばやく〔中に〕もぐり込みました。〔二〇・四六〕

石〔の雨〕が猛烈な勢いで落ちてくるなか、王は遠く菩薩や王子たちを避けて立ち去り、カンダダーラを伴って、恐怖する人々で混乱する宮殿に向かって出発しました。〔二〇・四七〕

その大臣と王が、雷光に白く照らし出された道の半ばまで来た時、稲妻が二人の頭を打ち砕きました。髪に〔頭蓋の〕裂け目から流れ落ちた脳漿のかけらが付着している〔有様〕でした。〔二〇・四八〕

諸王によって尊重される命令を下していた、かの王が亡くなったことを家臣たちから聞かされて、王妃は涙を浮かべ、その優しい心はあまりの苦しみの重荷に耐えきれなかったため、ただちに〔自分の〕命を解き放ちました。〔二〇・四九〕

石に打たれた王の宮殿は〔あらゆる戸口の〕ドアが砕かれ、内部から恐怖した人々が逃げ出すと、黄金の柱が割れ砕ける轟音が生じて、あっという間に崩落しました。〔二〇・五〇〕

その時雨雲たちはまるで怒りながら、「邪な心の二人、王とカンダダーラは死んだか、それともまだ生きているのか」と、いちめんに閃光を放つ『稲妻』という目を光らせて、あたりを眺めるかのようでした。〔二〇・五一〕

◇　夜明けごろ、菩薩は両親を荼毘に付し、一掬いの供え水をあげながら、戦慄する心をもって、「ああ諸仏・世尊たちのお説きになったことは本当だ―あらゆる有は生じては滅びゆくものだ」と考えて、彼の兄弟たちに語りかけました。

「わが母は、私という『子』の幼樹を成長させるために、『愛情』という水をかけてくださったのに、その果実を得ないままで、私の元から一体どこへ去ってしまわれたのか。〔二〇・五二〕

わが父は、王として大地をお守りになった後、法の破壊者であったカンダダーラと共に、どこに去られたのか。〔二〇・五三〕

〔ああ〕この、〔後の世に〕想起されるに価する栄華をもった、柱と大門の崩れ落ちてしまった、両親の宮殿を、〔地に〕砕けた彫像たちは悲しんでいるかのようだ。〔二〇・五四〕

これら、(a)ずれた接合部分から裂けてしまった、(b)〔あちこち〕煉瓦が崩れた、彩色が施された壁画は、色褪せて、自らを憐れんでいるかのようだ。〔二〇・五五〕

「これは、コンサートホール（歌舞音曲のための合奏堂）だったのか。或いは寝殿だったのか」と、宮殿の残骸から辛うじて推し量れるばかりだ。〔二〇・五六〕

〔やがて〕「ここにあの王の壮麗な宮殿があったのだ」と、〔往事を〕なつかしむ人々が、愁歎の心で他の人々に語ることだろう。〔二〇・五七〕

栄華を失った、石〔の雨〕に叩き殺された鸚鵡やコーキラ鳥のいた、王宮のこの園林は、〔今や〕物思いに耽っているかのようだ。〔二〇・五八〕

幸せへの願いが未完に終わった人々の不幸を見届けながら、〔物語の〕完結を意味する、「……以上。」という言葉〔だけ〕が、口惜しがる人のように、〔最後に〕残る。〔二〇・五九〕

『無常性』は、絶え間なく仕事をし続ける人間たちに、〔一生の物語の〕完結を意味する「……以上。」の言葉を〔無慈悲に〕宣告する。〔それは〕過去にも宣告しつづけてきたし、これからも〔未来永劫〕宣告しつづけるだろう。〔二〇・六〇〕

「この私が〔恒に〕在り続けているにもかかわらず、〔人々は〕天空を永遠だと語る」と〔言わんばかりに〕、『無常性』は、あたかも怒って上方を見上げるかのように、〔この世界に〕立ち続ける。〔二〇・六一〕

親族への愛を捨てて、〔ものや人に〕執着しない者たちは、他に依存しない生き方をしているゆえに、心の寂静を得ており、安らかな幸せにある。〔二〇・六二〕

妄想に駆られて感覚的享楽を求める人々において、『渇愛』は〔支配の〕足場を得る。『渇愛』にとらわれた心をもつ〔人々〕は、〔主人への〕隷属の合掌を屈辱にまみれながら(28)行う。隷属に苦しみながらも、彼らは最大限に〔主人の〕機嫌をとろうとして、盲人のように〔他人に〕従属している。従属する彼らは、苦しみの連続の中で、恥辱と悲嘆に支配されている。〔二〇・六三〕

苦労してようやく幸せを得ても、再び徐々に〔それが〕崩れ去ってゆく時、その崩壊にあたって、人は『心痛』の火を燃え上がらせながら、ひどく苦しむ。彼の苦しみの原因とは、『輪廻的生存に縛りつけること』を生じさせる、〔彼を〕欺す『渇愛』である。もし或る者たちが心において正しく『小欲たること』を確立しているなら、その者たちは甚だ幸せになるだろう(29)。〔二〇・六四〕

それ故、私は多くの禍という棘をもつ王位を放棄して、寂静（至福の境地）を求めて、寂静への道となる場所である、苦行林に行くことにしたい。」〔二〇・六五〕

彼（菩薩）は弟に〔王位の〕灌頂を執り行い、婆羅門たちから祝福を受ける彼に〔王権の〕仕事を委ねた後、〔自ら〕栄光を棄てて、堅固な心で、苦行力の増進を求めて、森へ去ってゆきました。〔二〇・六六〕

◇　―さあ、このように、菩薩であったかの世尊（釈尊）が、迫害を受けても、忍辱（堪忍）〔の心〕を弛ませることがなかったということをよく考えて、至福を追求する者たちは、忍辱という力を具えた者にならねばなりません。

『チャンドラ・ジャータカ』、〔第二部類の〕第十話〔終わる〕。

**【注】**

（1）今年ハリバッタの現存する全話の校訂梵文テクストを収めた Straube (2019) の本がインドから出版された。その本は私の許に本論文の原稿締切の前日に届いたため、急いでそれを見て、テクストの改善箇所を調べて、多少の和訳の修正を行った。

（2）六波羅蜜に従って話を区分けするこの作品構成の仕方は、先行するアーリヤシューラの『ジャータカマーラー』に倣ったものであろうが、アーリヤシューラのその作品は布施・戒・忍辱の三波羅蜜のテーマで全三四話の大部分が占められており、精進・禅定・智慧のテーマはどこの章に有るのかよくわからない（学者によって意見が異なる）有様である。Hahn (2007), p. 12, Hahn (2011), p. 13 を参照。ハリバッタの本作品のほうが、全三四話をもってきちんと六波羅蜜を完結するよう計画的に作られているといえる。

（3）ハリバッタの作品のウイグル語訳と梵語の両語併記の第三二話の断片写本については Mauue (1996) を、またトカラ語訳の第六話の断片写本については Schmidt (2004), Sieg & Siegling (1921) を、またスコイエン・コレクション写本の第三二話の梵文断片については Hahn (2002) を参照。

（4）Cf. Bailey, H. W. (1966); Khoroche (2017), p. 8; Straube (2006), S. 8-35.

（5）和訳にあたって Khoroche (2017) の英訳と Hahn & Lohöfer (2016) の独訳を参照した。―　この第一二話のパラレル文献として、最も重要なのは Kṣemendra, Bodhisattvāvadānakalpalatā No. 8 Śrīguptāvadāna である。そのテクストは Straube (2009) によって校訂され、独訳された。その Kṣemendra の第八章シュリーグプタ（徳護長者）・アヴァダーナは二つの過去物語を有し、その一つ目は三〇～三五詩節の、ハリバッタ第四話の兎ジャータカに相当する話であり、二つ目の過去物語は四四～七一詩節にある、このハリバッタ第一二話の孔雀ジャータカに相当する話である。それらの過去物語が含まれていない元のシュリーグプタ説話の研究としては、杉本瑞

帆（二〇一四）の論文がある。その杉本論文は多くのパラレル文献のリストを出していて便利であるが、ただし上記のKṣemendraの第八章ならびにDhammapada-aṭṭhakathā (I 434-445) がリストに載っていない。後者のパーリ文献の和訳は及川真介（二〇一五）五七〇～五八五頁にある。また「シュリーグプタ」の話名は『メルヴ説話集』の中に含まれているから、古くから有部の説話として伝承されていたことを知ることが出来る。辛嶋静志（二〇一七）一八九頁、Karashima & Vorobyova-Desyatovskaya (2015), p. 250, note 427を参照。シュリーグプタ説話の美術的な研究としてはZin (2006), S. 124-135がある。― ボロブドゥール遺跡にはこのハリバッタ第一二話の孔雀ジャータカの内容にあたる浮彫が第二廻廊欄楯にある。六場面があって（Krom II,B.62,63a,63b,64,65,66）、その次の場面（67）の浮彫は失われているので、本来はそれも含めて七場面から成るものと考えられる。並河亮（一九七八）二八三頁および宇治家祐顕（一九八一）二一一頁を参照。しかし千潟龍祥（一九八一）八三頁ではボロブドゥールのその浮彫についての情報が欠けている。― なおハリバッタ第一二話のプロットとは部分的しか合致しないが、孔雀が登場するジャータカとしては、Pali Jataka No. 159 (Mora-jātaka) とJataka No. 491 (Mahāmorajātaka) があり、またそのパラレル文献として『六度集経』三・二〇（T No. 152 康僧鎧訳）、『旧雑譬喩経』二（T No. 206 康僧鎧訳）、『仏母大孔雀明王経』（T No. 982 不空訳）がある。

（6） 孔雀王スヴァルナ＝アヴァバーサの名は、根本有部律『薬事』ならびに密教経典『孔雀明王経』Mahāmāyūrī-vidyārājñī の中に出る。その両テクストによれば、かつてヒマーラヤの南側に、釈尊の前生であるスヴァルナ＝アヴァバーサという孔雀王が住んでおり、彼はこの大孔雀明王の呪文によって、毎朝息災のまじないを行なっては日中を安楽に過ごし、夕方に息災のまじないを行っては夜分を安楽に過ごしていたという。『孔雀明王経』の梵文はS.v. Oldenburg (1897, 98, 99) と田久保周誉（一九七二）によって出版され、また岩本裕（一九七五）により和訳がなされた。この『孔雀経』の複雑な形成過程についての代表的な研究として、大塚伸夫（二〇一三）の第一篇第三章第一節がある。ハリバッタの本話の第七四詩節にある、maitrī-mantra という文句から、孔雀王の真言の存在が常識になっていたらしいことを知ることができる。ハリバッタの本話には、孔雀ジャータカに説かれる孔雀王がもつ解毒力や猟師の縄を切る力などの超能力を孔雀王のもつ真言の力とみなす密教的理解が潜んでいると言えるだろう。漢訳『大金色孔雀王呪経』（T Nos. 986, 987）は西暦三二〇年前後に漢訳されているので、ハリバッタの時代にはすでに孔雀王ジャータカと孔雀王の真言が結合した初期密教経典である『孔雀明王経』が成立していたと考えられる。しかしハリバッタが孔雀王の真言について知識を得ていたのは、恐らく『孔雀明王経』のような密教経典からではなく、彼が親しんでいたらしい根本有部の伝承からであろう。病人が医者の与える薬によって治らなかった場合、「大孔雀の明呪」Mahāmāyūrī-vidyā を用いることが根本有部律『薬事』に説かれている。『薬

事』のその記事については、岩本裕（一九八八）の論文ならびに八尾史（二〇一三）の和訳（五八二～五八五頁）を参照のこと。

（7）この話（Vartakāpota 若いうずら）はアーリヤシューラ作『ジャータカマーラー』の第一六話にもある。Cf. Panglung (1981), S. 46-47.

（8）シヴァ神はこの天女が四方角のどこにいても、その美しい姿を見ていられるように、自分の頭を各方角を向いた四つの顔にしたといわれる。Cf. Hopkins (1915), pp. 162, 220.

（9）天女メーナカーが苦行中のヴィシュヴァーミトラを誘惑した話は『マハーバーラタ』第一巻第六三章にある。Cf. Hopkins (1915), p. 164.

（10）古代インドでは女子が毬遊びを好んだらしい。インドの毬遊びの術を説明紹介した論文として、田中於菟弥（一九九一）：「毬戯術（Kanduka-tantra）について」、『酔花集』、春秋社、一八八～一九六頁がある。

（11）椰子の木の枝にカラスがとまった時、たまたま熟した椰子の実がカラスの頭の上に落ちてきたため、カラスは死んでしまったという話。

（12）アムリナーラ amṛṇāla は Apte の辞書によれば、芳香あるヴィーラナ草の根。これを草薬の一種と見なし、次の語の paṅka を泥でなく軟膏と解釈した。Khoroche (2017) の英訳も amṛṇāla-paṅka を「ベチバー精油」（vetiver lotion）と訳す。

（13）私はここで aṅgaja を文字通り「体から生じた」と形容詞に訳したが、aṅgaja の語は「愛神」の名詞の意味もあるから、aṅgajena を「愛神（つまり愛）によって」とも読める言葉遊びになっている。

（14）密教経典『孔雀明王経』に説かれる大孔雀明王の真言は、毒を消し、病を癒す効能のある真言である。

（15）第一二話のこの文の最後に、梵文写本Aとチベット訳には、後代の付加と思われる一散文と一偈頌が記されている。それを訳すと次のとおり：「世尊はこのジャータカを説明（記別）された。―〔韻文：〕王妃はチャンチャー・マーナヴィカーであり、王はシャーリプトラであった。孔雀王は私であり、孔雀たちは声聞たち（釈尊の弟子たち）であった。」

（16）ハリバッタの第一四話シュヤーマ・ジャータカは Demoto & Hahn (2010) によって梵文が欠けた箇所の蔵訳テクストと独訳を含む校訂研究が発表されており、私は和訳にあたってその論文を参照して教えられることが多かった。別の Hahn (1976) の論文は彼が梵文写本を入手する以前に、この第一四話に対して蔵訳テクストのみに基づいて行った独訳を含む研究である。橋本草子（二〇〇二）の論文はこのシュヤーマ説話のインドにおける並行文献と中国における漢文文献の多くを挙げて比較していて便利であるが、ただし Mahakarmavibhaṅga と『根本説一切有部毘奈耶薬事』をパラレル文献のリストに追加する必要がある。正量部の文献らしい

Mahākarmavibhaṅga には § 32-b, § 32-e の二箇所にシュヤーマの話がある。工藤順之（二〇〇九）、一二六頁。また岩本裕（一九七五）による和訳、二九七～二九八頁を参照。『毘奈耶薬事』の全訳は八尾史（二〇一三）により出版されたが、シュヤーマの話はその四一〇～四一三頁にある。義浄の漢訳では巻第十五、蔵訳では 41 (khe), 213,4,1 に位置する（cf. Panglung (1981), S. 45-46）。Kṣemendra, Bodhisattvāvadānakalpalatā No. 101 Śyāmakāvadāna の校訂された梵文・蔵訳と独訳は Staube (2009) にある。また Caryāpiṭaka の aṭṭhakathā 中の Sāmapaṇḍita-cariya の和訳は勝本華蓮（二〇〇七）二七二～二七七頁にある。―　本ジャータカを表現した説話図の、文献調査に裏付けられた美術的な考察は Schlingloff (1987), Schlingloff (2000) と東山健吾（二〇一二）によってなされた。

(17) この冒頭の詩節はその梵文テクストが写本に欠けているため、蔵訳から補って訳した。

(18) 下劣な象使いたち（『感官の諸々の対象』）が、よく統制されて堅固な象の群（『諸感官』）にうかつに近づくことが出来ない状態になった時、彼らは象王（『心』）であるお前を苦しめることはないだろう、という意味か。

(19) 第一四章のこの詩節は複数の語の語呂合わせで出来ている。「自ら尊師（guru）としての自性をもちながら、尊崇の心をもって両親（guru）を世話する彼は、火（kṛśānu）に供物を捧げつつ、精神は広大で（akṛśa）堅固で気高く、身内（svajana）と他人（jana）に平等な（sama）心を持って、諸々の苦行を習得しながら（āgamayat）、その庵で多くの年（samā）を過ごしました（agamayat）。」

(20) 写本の欠損により、梵文テクストが「そこで王は彼ら二人をかかえて、矢に射られた……」の文句から後、話の最後までずっと欠けているので、私はここの箇所から後の残りすべての部分を蔵訳に基づいて訳した。

(21) 蔵訳のこの第一四章四五詩節は、父が息子に起こった不運の凶兆を事前に見たことを語っているとも解釈できる。

(22) ハリバッタの第一九話、六牙白象の話のパラレルである諸文献のリストは伊藤千賀子（二〇〇八）、一五八～一六〇頁にある。ただし其処に挙げられていない文献として、Kalpadrumāvadānamālā No. 25 Ṣaḍdantāvadāna と Bodhisattvāvadānakalpalatā No. 49 Ṣaḍdantāvadāna が有る。de Jong (1977) によれば後者の第四九章のテクストは前者の第二五章からの抜粋で大部分が出来ている、ネパールで作られた作品である。前者の梵文テクストの校訂は de Jong (1979) によって、後者の校訂は Straube (2009) によってなされた。本説話の詳しい諸本比較研究として伊藤のほかに Feer (1895) と杉本卓洲（二〇〇六）がある。なお象が登場する Bodhisattvāvadānakalpalatā No. 96 Hastyavadāna や Āryaśūra Jātakamālā No. 30 Hastijātaka は、本話とは異なる話である。

(23) 象から生じる真珠について、原実（一九六六）、一六八頁、一七五頁を参照。

(24) ハリバッタの第二〇話チャンドラ王子と同一の話の異なる伝承として、パーリの Khaṇḍahāra Jātaka (Jātaka No. 542) と Caryāpiṭaka

中の (1.7) Candakumāracariya がある。Caryāpiṭaka の aṭṭhakathā にある Candarāja の和訳は勝本華蓮（二〇〇七）七〇～七六頁にある。なお Avadānaśataka No. 52 Candāvadāna や Kalpadrumāvadāna No. 15 Candrāvadāna（Avadānaśataka からの韻文による再話）は、本話とは異なる話である。

（25）この段落は、この王がもつ幾つもの善い性質を挙げているが、人のどんな長所にも短所が表裏一体となって隠れている。王の (d) (e) (f) の性質は悪人につけこまれる時、短所になる。悪い方向に発揮される時、この (d) (e) (f) の性質は、(d) 頑なで、(e) 悪い大臣の意見に耳を傾けすぎ、(f) 人生の享楽的な目的に執着しすぎること、の皮肉な表現となる。

（26）第二〇話第二詩節と次の詩節は、第八話（蓮華王ジャータカ）の第九と第一〇詩節と同一である。

（27）第一二詩節は蔵訳テクストには欠けている。

（28）梵文テクストの nikāramalinaṃ「屈辱に汚れた」の文句は、蔵訳では rang bzhin gyis ni dri bcas「自性により（自然に）汚れた」と訳されている。Hahn はその蔵訳について *nisargamalinaṃ という梵語を推測する。その場合、「屈辱にまみれた隷属の合掌」ではなく、「自性により（自然に）汚れた隷属の合掌」という意味になるだろう。

（29）第六四詩節は第一一話（鹿ジャータカ）の第四三詩節と同一である。

## 参照文献（前論文に記したものを省く）

〔序で言及した研究〕

**Bailey, H. W. (1966):** "The Sudhana Poem of Rddhiprabhāva", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. 29, No. 3, pp. 506 - 532.

**Hahn, Michael (2002):** "Haribhaṭṭa's Jātakamālā", in: *Buddhist Manuscripts*, Vol. II, (Manuscripts in the Schoyen Collection, vol. III), ed. by Jens Braarvig, Oslo, pp. 323-336 and plate XVIIc.

**Maue, Dieter (1996):** *Alttürkische Handschriften, Teil 1. Dokumente in Brāhmī und tibetischer Schrift*, (Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland. XIII.9), Stuttgart, S. 86-115.

**Schmidt, Klaus T. (2004):** "Indo-Tocharica. Die Bedeutung anderssprachiger Parallelversionen für die Erschließung des tocharischen Schrifttums", in: *Turfan revisited : the First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*, edited by Desmond Durkin-Meisterernst ... [et al.], Monographien zur indischen Archäologie, Kunst und Philologie, Bd. 17, Berlin 2004, S. 310-311.

**Sieg, E. & Siegling, W. (1921):** *Tocharische Sprachreste. I. Band: Die Texte. A. Transcription,* Berlin / Leipzig.

**Straube, Martin (2019):** *Haribhaṭa's Jātakamālā. Critically edited from the manuscripts with the help of earlier work by Michael Hahn*, Pune Indological Series II, Dept. of Pali, Savitribai Phule Pune University, Pune.

〔第一四話〕

**Karashima, Seishi & Vorobyova-Desyatovskaya, Margarita I. (2015):** "The Avadāna Anthology from Merv, Turkmenistan", *Buddhist Manuscripts from Central Asia, The St. Petersburg Sanskrit Fragments* (StPSF), Volume I, The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University, Tokyo.

**Hopkins, E. Washburn (1915):** *Epic Mythology*, Strassburg.

**Oldenburg, S.v. (1897-1899):** "Mahāmāyūrī", *Zapiski Vostocrngago otdelenia Imp. Russk. Arkheol Obshchestva,* XI, pp. 218-261, Petersburg.

**Panglung, Jampa Losang (1981):** *Die Erzählstoffe des Mūlasarvāstivāda-Vinaya, analysiert auf Grund der tibetischen Übersetzung*, Studia philologica Buddhica: Monograph series 3, Reiyukai Library, Tokyo.

**Zin, Monika (2006):** *Mūleid und Wunderkraft: Schwierige Bekehrungen und ihre Ikonographie im indischen Buddhismus*, Wiesbaden, S. 124-135.

**岩本裕**（一九七五）：『仏教聖典選第七巻、密教経典』、読売新聞社。

**岩本裕**（一九八八）：「第一章 Mahāmāyūrī の成立について」、『岩本裕著作集第一巻　仏教の虚像と実像』、三四三～三四八頁、同朋社。

**宇治家祐顕**（一九八一）：『仏教遺跡ボロブドゥールの研究』、アジア文化交流センター。

**及川真介**（二〇一五）：『仏の真理のことば註（一）』、春秋社。

**大塚伸夫**（二〇一三）：『インド初期密教成立過程の研究』、春秋社。

**辛嶋静志**（二〇一七）：「トルクメニスタン・メルヴ出土説話集」、『アジア仏教美術論集 中央アジア〈1〉ガンダーラ～東西トルキスタン』（編集：宮治昭）、中央公論美術出版。

**杉本瑞帆**（二〇一四）：「火中の蓮華」、『龍谷大学佛教学研究室年報』一八号、（一）～（一八）頁。

**田久保周誉**（一九七二）：『梵文孔雀明王経』、山喜房仏書林。

**並河亮**（一九七八）：『ボロブドール―華厳経の世界』、講談社。

**八尾史**（二〇一三）：『根本説一切有部律薬事』、連合出版。

〔第一四話〕

**Demoto, Mitsuyo & Hahn, Michael (2010):** "Ergänzungen zur Überlieferung des Śyāmakajātaka", *Festschrift für Dieter Schlingloff*, hrsg. von Eli Franco und Monika Zin, Lumbini 2010, pp. 161-194.

**Hahn, Michael (1976):** "Die Haribhaṭṭajātakamālā (II). Das Śyāmajātaka", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*, XX, S. 37-74.

**Panglung, Jampa Losang (1981):** *Die Erzählstoffe des Mūlasarvāstivāda-Vinaya analysiert auf Grund der tibetischen Übersetzung*, Studia philologica Buddhica, Monograph series 3, Reiyukai Library, Tokyo.

**Schlingloff, Dieter (1987):** "Das Śyāma-jātaka: Schultradition und Bildüberlieferung einer buddhistischen Legende", *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hīnayāna-Literatur*, Erster Teil, S. 203-218.

**—— (2000):** *Ajanta. Handbuch der Malereien / Handbook of the Paintings I. Erzählende Wandmalereien / Narrative Paintings,* 3 vols., Wiesbaden.

**岩本裕**（一九七四）：『仏教聖典選第一巻 初期経典』、読売新聞社。

**勝本華運**（二〇〇七）：『チャリヤーピタカ註釈 パーリ原典全訳』、国際仏教徒協会。

**工藤順之**（二〇〇九）：「(Mahā-)Karmavibhaṅga 所引経典類研究ノート(3)：残余の文献」『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』一二号、一三三～一五二頁。

**橋本草子**（二〇〇二）：「シュヤーマ本生説話の変容：仏典を中心とする」、『京都女子大人文論叢』五〇号、一〇九～一三〇頁。

**東山健吾**（二〇一二）：「敦煌石窟における本生説話図の形式 ―「シュヤーマ本生」図を中心に」、『美学美術史論集』（成城大学大学院文学研究科）、一四輯、一一～四二頁。

〔第一九話〕

**Feer, Léon (1895):** "Chaḍḍanta Jātaka", *Journal Asiatique*, 1895, tome V, pp. 31-85, 189-223.

**De Jong, J.W. (1977):** "The Bodhisattvāvadānakalpalatā and the Ṣaḍḍantāvadāna", *Buddhist Thought and Asian Civilization. Essays in Honor of Herbert V. Guenther on His Sixtieth Birthday*, Emeryville, Cal., 1977, pp. 27-38.

**――(1979):** "The Sanskrit text of the Ṣaḍdantāvadāna", *Indologica Taurinensia*, vol. VII (1979), Torino, 1981, pp. 281-297.

**杉本卓洲**（二〇〇六）：「ジャータカの変遷 ―「六牙象本生」を例に」、『北陸宗教文化』18、1～33頁。

**原実**（一九六六）：「真珠」、『金倉博士古稀記念印度学仏教学論集』、平楽寺書店、一六七～一八二頁。

〔追記〕

ハリバッタの第七話『資産家の子ジャータカ』（Śreṣṭhijātaka）についてはそのパラレル文献が Khoroche (2017) の英訳において注で記述されていない。しかしこの話のソースは明らかである。この話は Divyāvadāna の第三二章 Rūp(y)āvaty-avadāna の中にある、チャンドラプラバという少年が畜生たちに自分の身を布施しようとして墓場に行き、ウッチャンガマという鳥と会話した後、鳥たちに体を食べられて死んだという一つの過去物語を詳細化したものである。ハリバッタは根本有部の Rūpyāvatyāvadāna の話と伝承が非常に近いアヴァダーナを利用し、その一つのアヴァダーナの中にあった二つの話を独立させて、第六話と第七話を作ったのであろう。

※本研究は JSPS 科研費 17K02217 の助成を受けたものである。